

253

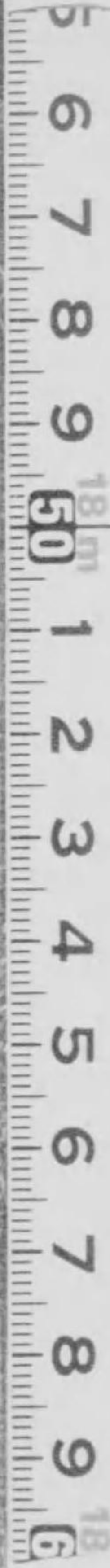
179

育教の義主覺自

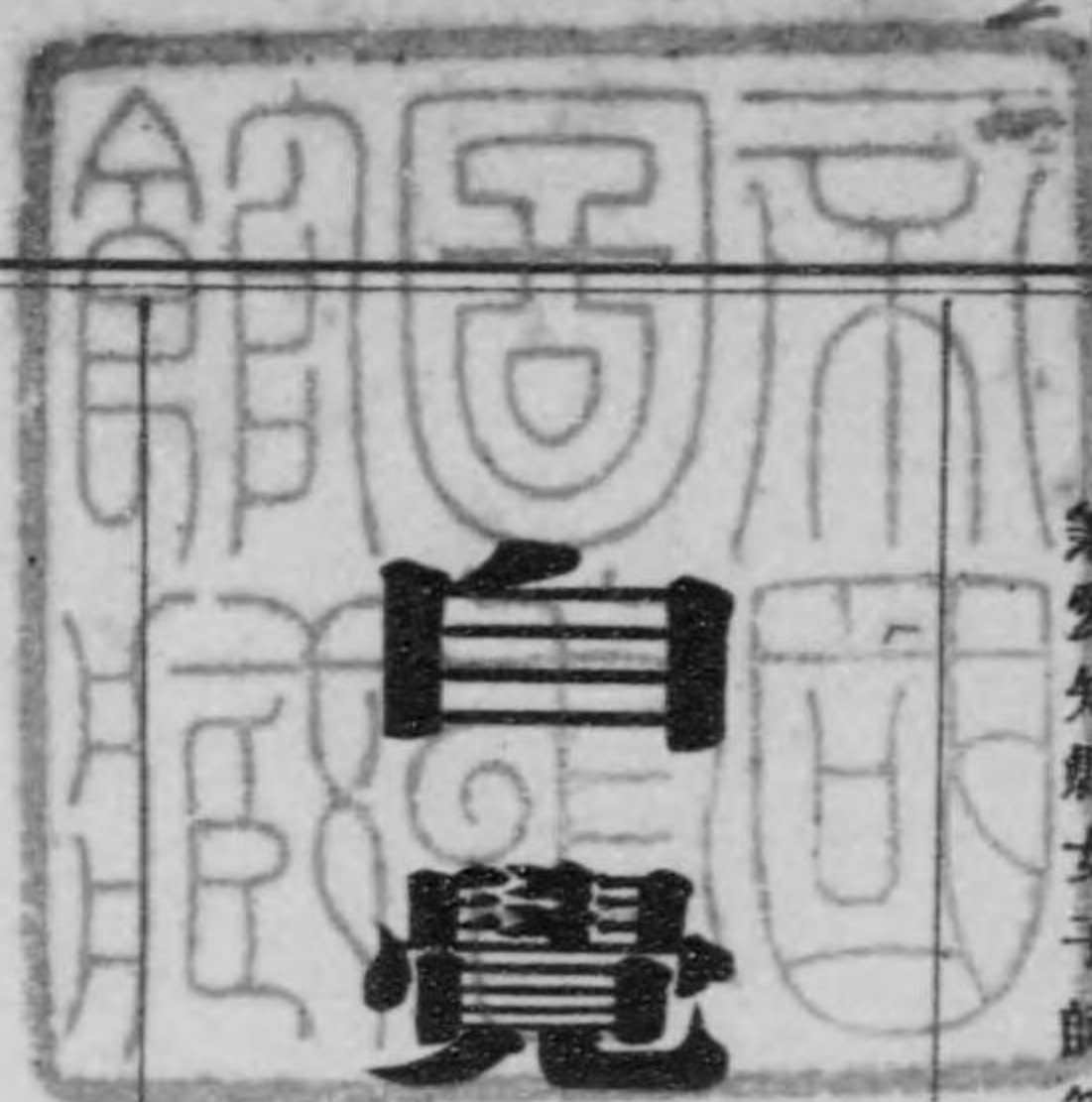
著 さ あ 黒 石

行 發 社 發 研

始



253-179



# 自覺主義の教育

貴族院議員文學博士  
東京帝國大學教授文學博士  
奈良女子高等師範學校校長  
兼愛知縣立第二高等女學校  
兼愛知縣女子師範學校教諭

澤柳政太郎序  
芳賀矢次序  
石槿山榮著

東京 開發社發行

大正  
8. 10. 29  
内交

## 序

教育上の意見は實際教育の經驗に根據を有するものにして始めて價值ありとは數年來自分の主張する所である。近時教育に關する著述は少くないが、多くは著者の頭から書かれたるもの、又は幾多の書を見て其の中から綴りたるものであるのは自分の常に遺憾とするところ。もとより一人の經驗や、數年の實歴やから千古不易の眞理を導き出すことは出來ないけれども、實際の教育から割り出された意見は頭の内では考へた想像説よりも根據ありといへる。少くも實際教育の記録としての價值を有する。本書は石黒女史が數年の教育的實歴に立脚して述べられたるものであるとのことであるから、世のありふれたる教育書よりも價值あるものといふべきである。

近時婦人にして文筆を以て顯はるゝもの少くないけれども、其の多くは小説をものするものである。外國語をよくする婦人で反譯書を出すものもあり、又近頃雜誌の上で議論文を書くものもある。今や小學教育に従事する女子は四萬の多きに達し、中等教育に教鞭をどる女子も千數百名に及ぶと思ふ。しかるに其の内から教育上の著述を爲したるもの皆無ではなからうが、其の數は極めて少い。石黒女史の此の著は必ず數萬數千の女教員を刺戟して、己も亦述作する所あらんとの志を起すに至る事と信する。自分は此の意味に於ても女子教育家たる石黒女史の本書を衷心より歓迎し廣く世に推奨する次第である。

大正八年十月

澤柳政太郎

## 序

先年名古屋の教育會へ行つた折、始めて著者石黒女史の父君磐翁に遇つた。爾來翁の依頼により、國文學研究の方法等に就いて、女史に種々の注意を與へたこともあつたが、間もなく女史は文部省の教員檢定試験に合格せられ、やがて高等女學校に教鞭を執られることになつたのである。學術に熱心で、教授に忠實であるといふことは、しばし人の噂にも聞いた。此の頃翁また本書の稿本を懐にして予を訪ねられ、「これ我が女の初作なり。一見せられよ。」とて示された。一讀したところ、女史が教壇上の經驗から、女教員としての觀察を遠慮なく述べられたもので、數年前國語上の疑問を質された女史とは全く別人の感がある。これで見ても、女史の學問見識の年

年進歩しつゝあることを知るに足ると思ふ。全國幾多の女教員等には必ず女史に共鳴するものもあらうし、また一般教育者にとつての参考になることもあるに相違ない。よつて翁に勸めて、これが印刷を開發社に托したのである。茲に聊か本書出版の由來を記して、女史を紹介するのである。

大正八年十月

芳賀矢一しるす

## 序

余は先年愛知縣女子師範學校を視察して各教室を巡りたるとき一女教師の國語を教授するに遇ふ。其の年齢未高からざるにも拘らず教授頗老練にして而かも活氣に富めるを見て其の良教師たるに敬服したり。後にて聞けば此の良教師こそ本書の著者石黒あさ子女史にてありけれ。女史は前代議士石黒磐君の女なり。父の教育を受けて漢文をよくし又國語に深く文部省の檢定試験に及第して中等學校に於ける國語漢文の教員たるの資格を得たり。本書は女子の實地の經驗より生れたる意見にして女史の教育的自覺に外ならず。余は本書の所論に對し悉く同意なりと稱すること能はずと雖述ぶる所一々現時教育界の弊害に該當し教育改善のため確に緊要の文字たることを

序文

信するものなり。而かも女性にして此の著あるは女子教育者のため  
意を強うすべきのみならず世の女教師を輕視する者に對して一痛棒  
たるを疑はざるなり一言述べて序言と爲す。

大正八年十月

槇山榮次識

# 自覺主義の教育

## 目次

### 第一章 教育の本質

- 第一節 教育の根本原則は共通不變である……………一
- 第二節 日本帝國の教育……………一〇
- 第三節 思想統一的の教育……………二〇
- 第四節 教育の社會化……………二八

### 第二章 教育の方法

- 第一節 國體尊重の念を鞏固ならしむる方法……………三七

目次

二

第二節 獎勵すべき獨創的教育……………四二

第三節 徹底的の教育……………五二

第四節 自由平等の訓育……………六九

第五節 智育德育の獎勵を閉却するな……………七五

第六節 眞實なる訓育的教授……………八五

第七節 日本的趣味の養成……………九一

第八節 中等學校に新設を希望する學科……………九六

第九節 學科及び學級の系統的擔任……………一〇三

第十節 理想の教師……………一〇八

第十一節 如何なる人が視學及び校長に適するか……………一二〇

第十二節 教師の能率増進を圖れ……………一二九

第十三節 教師の教壇上に立つまでの用意……………一三三

第十四節 無用なる形式を廢せよ……………一三六

第十五節 漢字と羅馬字及び毛筆とペン……………一四五

第十六節 教師は醫學上の知識を必要とす……………一五三

第十七節 トラホームの媒介者は誰か……………一五九

第十八節 習字及び圖畫の教師……………一六二

第十九節 男女教員の心得……………一六八

第二十節 虛榮の導火線……………一八〇

第二十一節 家庭の眞相個性の淵源を知るには……………一九一

第二十二節 投稿歡迎……………一九四

第二十三節 試験及び成績考査……………一九九

第二十四節 男教師と女教師との員數及び長短……………二〇九

第二十五節 教員の待遇方法……………二二二

目次

三

目次

四

第二十六節 學校生徒の氣力と風儀……………二二六

第二十七節 女學生の意志……………二三九

第二十八節 涙ある處置……………二四四

第二十九節 何故に體罰が用ひられるか……………二四七

第三十節 學校の増設……………二五六

自覺主義の教育目次終

自覺主義の教育

石 黒 あ さ 著

第一章 教育の本質

第一節 教育の根本原則は共通不變である

教育の根本原則は、時代と場所とによつて異り、文化の進歩に従つて變遷せねばならないかの如くに、一般に論評せられ、或は自然的教育説の盛に唱道せられし時代もあり、或は理想的教育説を極致とせし時代もある。又他の一方に於ては、社會的教育説を尊重するあれば、又個人的教育説を主張するもある。而して、國家的教育説、

第一節 教育の根本原則は共通不變である



人格的教育説、實驗的教育説、藝術的教育説、作業的教育説等各其の主張する所があつて、夫々流派を爲せしも、其の主眼とする所は、何れにありやといへば、人をして完全無缺に發達せしめて、天與の恩恵に浴せしめんとするにありとすれば、教育は古今を通じ、東西を問はず、共通不變の基礎の上に確立するものであるといはねばならない。世の教育者が幾多の説を臚列して、教育の根本原則すら、時代と場所によつて移動するが如き説を爲すは、教育の進路を混亂せしめ、徒に多方面ならしむるの嫌がないではない。教育學の研究未だ其の極に達せざることば、殆んど、倫理學と同様にして、物理化學の如く發達進歩せざる今日にあつては、深く非議すべきではないけれども、何れも其の究竟の目的が、人類をして圓滿に發達せしめ、最上の福利を享受せしむるにありとすれば、自然的教育者が客觀を

本位と爲し、唯物論を唱道して、其の目的に到達すべき捷路とせしめ、一の方法である。又、知的或は情意的に、重きを置いて、主觀を本位と爲し、之れを開發せなければ、其の所謂究竟の目的に到着することか出來ないとなし、唯心論を主張するも、是亦一の方法である。而して、個人的教育主義を尊重して個性の發達を力説し、或は、社會國家の發達は教育の本旨であると極論すれども、人は、元來、他の動物と違つて、人間らしく發達すべき素質を有し、他の動物にない、自覺を本とせる精神の活動を有し、其の努力に依りて人間生活を豊富にし、萬物をも征服し得べき靈智を有するものであるから精神的の開發に努めねばならない。又、人は團體性を有するが故に、團體、即ち、社會國家の發達を圖らなければならぬ。換言すれば、知情意を圓滿に發達せしめ、社會國家に對して、其の一員

たるの役目を、行はしむるのみならず、社會國家の發達を助成し得べき人間を作らんとするのが教育の目的である。是に至つて、甫めて倫理學の所謂、最大幸福を得ることが出来るのである。即ち、人間として完全なる境遇に生活することを得るのである(自我實現)人文の進歩に連れ、道德や教育に變化を受くるは、恰も、場所の異るところに、各異りたる道德や教育の行はれて居ると同様にして、目的地向つて進行中の一段階のみ。決して根本的の動搖でないことを知らねばならない。

前に述べし如く、自然主義は、唯物論にして現實主義である。即ち、現實の眞を應用して、其の利を享受し得るを目的とし、形而上の學は、全然、無用の長物なりとして之れを排斥し、専ら、自然科学法に依らんとし、道德も政治も皆、「存在其の物自身が價值である。

現實其のまゝが眞である。善であり、美であると論せし結果、道德上の唯物的個人主義現實主義本能主義に傾き、其の極、或は無政府主義、或は虛無主義に陥るの弊が潜んで居るではないかと思はる、又理想主義にあつては、専ら心的の上に論證せんとし、所謂唯心論なるが故に、其の弊は、生活の實價を度外に置き、空虚に陥るの結果商工業の發達は、得て望むことが出来ないから、社會は終始、貧弱の生活を以て満足せねばならない。次に、個人主義に就いて言はんは、ニイチエレンケールの主として論唱するところであるが、個人文化を尊重し、兒童を本位とし、而して、天才偉人を作ること力を説いて、教科書の如きも規定せず、選擇せしむべしといふ。是れ、或意味に於ては、正當なるべしといふも、社會文化を輕視して、個人實在に重きを置きしはよろしくない。偉人も社會文化によつて養成

せられるので、社會文化を離れて個人も發達するものでないからして、或は其の極危険に走るやうなことがあるかもしれない。之れに反し、社會的主義は個人の存在を認めず、個人を機械視して、一樣に養成せんとするが故に、天才偉人も何等の價値がない。従つて教科書の如きも、決して選擇せしめぬのである。是れはシユライエル、マツベル、ナトルプ等の主張に屬してゐる、而して國家的教育はケルシエンシユタイナーを初め、英國獨逸佛國米國等の哲學者教育學者の論稱する所であるが、國家生活觀を基礎として居るが故に、單に、社會といふが如き空漠ではない。且つ文明國人互に區域を立て各其の發達の程度を異にし、形式を異にするから實際上、國家的生活を營む方が便利である。而して、其の國家の理想生活とする所は各個人の理想生活であるから、國家的生活と、其の一員たる各個人

生活と矛盾せないのである。殊に、各國互に勢力競争の結果、各個人の發達を期するより、一國の發達を圖るを上乘と考へ、教科書の選擇は容易に許さぬのである。要するに國家的教育主義は、或る點より觀察するとき、社會的教育主義に接近せしが如き傾向あり。又、或る點より論するとき、個人的教育主義を擴大せし嫌がないではない。最後に、人格的教育主義に就いて一二を記すれば、オイッケン等幾多の學者によりて、論唱されしところなるが、純粹な精神生活、即ち、自然的精神的な生活體を云ふ。人には自然法以外に精神の自由なる働きを有し、従つて人格の威嚴を有するものである。又、人の精神は知力のみより成るものではない。感情意志の働が其の根柢にありて自發し活動して、創造力を生じ、此の創造力を養成する爲めに兒童の個性を尊重し、其の人格を重んじ、兒童本位の教

育を中心とし、又智餘りありて徳の足りないのは悪いから、情意を練り、一定の信念理想を與へて、實行の意志を鞏固ならしめ、而して、自由なる精神を伸長し人格を發達し、品性を形成して、以て自然に従ひ天功を助くるがごとき、精神的の人を作るにありて、國家社會の利益の爲めに個性を蹂躪し、天才を犠牲にするがごときは、其の反對するところにして、寧ろ、國家社會の發達を多方面ならしめ高尚ならしむるが如き人を作るを主眼とし、特に、現代の如きは物質的文明發達し、精神的文明缺乏せしが爲めに、人々生活に追はれ慾望に驅られ、機械的の生活に墮落し、精神過敏となりしものに對して、精神の自立を全うし、人間の權利、人格の威嚴を高尚にすること等を主張したのは素より可なるべきも、國民的原質を養成することに多少不足してゐるやうに思はれる。又、人格の知的方面を

輕視し過ぎるの嫌がある。情意的方面の重すべきは素よりなるも、知力も輕視すべきものではない。但し、人格的教育主義は輓近の説にして、未だ、充分に研究されて居ないから、亦止むを得ないけれども各方面に歡迎せらるゝところの説である。

教育の目的は、倫理學之を決すると、ヘルバルトが云ひし如く、教育學は、倫理學とは密接の關係を有するが故に、倫理に就いて一言せんに、人間は、全體如何なることを知り、如何なることを行はねばならないか、善とか惡とかいふものは、如何なるものか、直覺的、又は、經驗的に依つて推斷し得べきも、善惡其の物の標準に就いては、倫理學者が一大問題として苦心研究せしも分明でない。スピノザ、ヘルバルト等の原子、實素説、及び、シヨツペンハーエルが宇宙の活動力であると論證したのは、多少取るべきが如くなれど

も、亦判然せず、英國學者等の説はスペンサーの幸福を得る條件説、及びグライソンの自我實現説の外は、一つも論ずるに足らないやうに思はる、又、支那及び我國の倫理學者の稱道した、天命説の如きも、殆んど、空漠にして、宗教家が人間以上に或る尊きものがありて、善惡を指定し云々と説くも、亦捕捉することが出来ないのである。私は曾て善惡の標準に關し、疑惑に堪へざりしが一日之を父翁に聞きしことあり。而して稍々信する所がないでもない。けれども之を今日發表することを許されざるにより、單に疑問の一端を掲げて識者の研究を望むのである。

## 第二節 日本帝國の教育

今や世界を震動させし歐洲の大戦亂も、漸く其の局を結び、佛蘭西ウエルサイエ宮殿に於て、講和談判は相調ひ彼此の調印は既に済

んだが、惟ふに五ヶ年に互りし戦費は、平和條約成立に至るまで約四千億圓に達し、動員總數五千三百萬人許りにして、其の内八百萬人の人命を犠牲にしたとのことであるが、この戦争の爲めに費した無形的の損害を合算すれば、幾億萬圓であるかを知らぬ。此の如き戦禍の恐るべきことは、獨り、其の局に當つて居た各國民の恐怖戦慄せしのみならず。中立國其の他、無關係の國民と雖も皆これを知つたのである。従つて、講和會議の開催も、單に、戦争の後始末をつけようと言ふだけでなく、未來永劫この如き恐るべき戦禍を避くべき方法を、設けようと思ふ。國家主義を極端に利用せし反動として、博愛的世界主義の出現も、亦謂れがないではない。國際聯盟は成立するならんも、今後各國民の思想は如何なる方向に進むであらうか。

大戦役の結果として、國際關係の上に一大變動を來し、國民思想の上に一大動搖を生じ、將に、世界改造の氣運を醸成せんとしつゝあるではないか。これこそ、吾々の大いに考慮すべき問題にして、豫め教育上に於て、これが設備をなさなければならぬと信するのである。願れば、我が國の教育は、元來、神儒佛の三道について、各其の長所を採りて、國民の教育をしたのである。素より三者の説くところ、合一の點多くして、相容れない點が少いから、國民思想を混亂せしむるほどの不都合は、嘗て見なかつたが、人文開發の資に供すべき點に至つては、三者共に満足せられない。明治維新の當時、西洋文物の入つて來たのは、右の缺點を補ふに足るとは雖も、これが爲めに、國民思想の上に於ても、亦一大刺戟をうけたから、國民の思想は殆んど、混亂状態に陥らんとするや、叡明なる 明治天皇

陛下の教育勅語を下し、教育の方針を示させ給うたので、幸に國民思想の大混亂は避けることが出來たが、教育制度・教育方法等、多くは、西洋の爲すところに倣ひ、我が國獨特のものは殆んどないからして、健全なる獨特の國民思想を、作り得なかつたのである。殊に物理化學の發達經濟學の進歩は、他の學科の遅々たるに似ない。従つて、國民生活の基礎に一大變化を來し、衣食住を始め萬般の事柄に於て、新生活が眼前に展開せられたから、國民の思想に一大變遷を來せしも、勢の已むを得ないのである。是に於てか、教育上の方針を一變して、空理に馳せず、着實ならしめねばならない。さうして又、人心を束縛して偏狭ならしむるが如きことは、努めて避けねばならない。所謂其の方針とは、建國の根本に觸れない範圍に限り、自由平等の教育を施して、一大健全なる日本國民を作りたいと思ふ

そも、この自由平等なる語たるや、近來一種の流行語の如くであるが、私は、徒らに流行を追うてこの言葉を使用したのではない。眞摯なる態度を以て、現代の缺陷多き教育の歸着點を論ずるには、これほどよいモットーはないと信じて、敢てこの語を使用したのである。教育上の自由平等主義を論ずる前に、政治上に於ける自由平等主義の意味について、一言述べてをきたい。この自由平等の有する思想は、個人主義の長所なる自己尊重の觀念と、國家主義の長所なる義務尊重の觀念と結合したる、一種の制度主義であつて、これは人類生活の原始時代より、潜伏して居た思想にして、今日其の聲が高まつて來たのである。獨り、歐米にのみ存するものではない。我が國列聖の國民に臨ませらるゝ跡を見ても、自由平等にして、父母の子を愛する如くあらせられたのは、日本歴史の證明するところに

して、近く 明治天皇陛下の萬機公論に決するとの思召も、亦これに外ならないのである。自由平等は、所謂共產主義社會主義過激派等の唱ふるものとは全く其の本體が違つてゐる。但し、人民間に於ける從屬關係なるものなく、自由平等を意味して居るから、徒らに、國民思想を壓迫する時は、危険ならざるものをして反つて、危険ならしむるの虞がないと思はれる。

さて、教育上に於ける自由平等主義的教育は、既に、江湖の學者の研究し、論議するところにして、デビット氏曰く、自己指導セルフディレクションの教育の精神は、第一には、貧者をして貧ならしめぬやう、貧より生ずる罪惡を如何にして除かしむるかといふ、即ち、職業的知識を授けねばならぬ。第二には、公民としての義務を辨へしむるものでなければならぬ。今、私が力説しようとするところの教育上の自由平

等といふ意味も、殆んど、これと同一にして、現在の我が國教育上の缺點は、職業的知識授與・公民的義務觀念養成といふことに不十分であれば、この方面に一層留意すると同時に、教師と生徒とが、共に人なりといふ觀念を以て、互に、親密に相接せねばならぬといふことである。即ち、教師に於ては、生徒を奴隸、又は牛馬視しないことをいふのである。其の反對に、教育上の官僚主義といふ意味は教師と生徒との間に階級を立て、意志の疏隔をなした有様をいふのである。この官僚的の弊風は、我が教育界の一大缺點である。この弊風を一掃して、教育勅語の趣旨を貫徹するには、自由平等且つ、崇高なる國家的人格を有する人を作るやうにしなければならぬ。是れ、私が教育上に於て、特に、自由平等主義を説く所以である。

露西亞の革命の如きは、壓制に對する反動的行動として、一時是非なきこととするも、土崩瓦解、其の極に達し、二ケ年許なるにも拘らず、猶、拾收すべからざるの状態にして、各國政府をして眉を擧めしむるに至つたのは、元來露國民が、教育によつて受くるところの知識は、絶無でないとするも、其の修養せられた愛國心が、甚だ、薄弱なる結果ではあるまいか。轉じて、獨逸の有様を見れば、普魯西が、嘗て、佛帝ナポレオン第一世の爲めに、抑壓せられ、これが屈辱を雪がんには、普魯西國民をして、専ら實利主義に依り、智力を練らしむるにありとして、情意方面の趣味、道德方面の品性を養ふことを外にした結果、人をして無味乾燥ならしめ、たゞ富、權勢、名譽に熱中する卑俗なる機械的人間を作り出した、而して、普魯戰爭、普佛戰爭に打ち勝ち、上下共に、驕慢に驕慢を重ね、終に世界を相手として干戈を交へ、あらゆる暴虐をなし、人道を無視し



て、些の反省なく、遂に降伏的講和を請ふに至りしも、素より其の  
ところであらう。パウエルコーンバツハが、大戰勃發前既に、「獨逸觀」  
といふ書を著して、今日の如く獨逸が、國家々々と叫んで、目前の  
國家の進歩ばかりを目的として、國民を教育して行くときは、獨逸  
國民は、世界の大勢に逆行し、世界の人より同情を失ひ、孤立して  
結局、世界的勢力たる位置を失ふやうになるであらうと、警告した  
そのことだ。其の他の學者にも、亦、實科主義の教育に重きを置き  
しを、非難せし人も多々あつたと聞いて居るが、獨逸の慘憺たる今  
日あるも、國家的教育主義を極端に悪用して、道徳を度外に置き、  
一に體力を練り、智力を開くに、汲々たるの結果にあらざるなきか  
と、斷言することが出来る。教育は利刃である。これを用ふるの法  
一度誤れば、其の害の少小でないことは、豈偶然ならざらんや。

熟々、歐洲大陸の教育を観察し來れば、十七世紀より二十世紀の  
今日に至り、社會的教育主義を排し、個人的教育主義を退け、漸々  
改正したとは雖も、前節にも、烏渡、述べた通り、各國權力競争の  
結果、國家的教育主義を尊重せしは、獨り、獨逸のみではなく、各  
國教育の狀態は、比較的文科を輕視して、實科を重要したやうであ  
る。而して、國家的教育主義の原素は、個人的教育主義の原素と相  
距ること僅か數寸の差あるに過ぎないのであるから、悪用の結果此  
の如き戰渦に出會つたのも、已むを得ない次第であるが、我國の教  
育も、元來歐洲の教育を模倣せしものなれば、又多少其の傾向がな  
いではないから、當事者は勿論、多少とも、教育に關係して居る人  
人は、この邊に留意して、着實にして悠容迫らず、思想健實なる國  
民を養成せねばならぬ。着實でなかつたならば、輕佻、浮薄に陥り、

一時の繁榮に眩惑し、奢侈の習慣を作つて、反つて、人類の幸福を破壊するの弊に墮落する。又、國民の思想が偏狹なるときは、個人間に於けると同様、各國民、互に、猜疑の念を以て交際するが故に、人類共同の幸福を増進するの途に進むことは出来ない國際聯盟にして、幸に成立するも、國家的教育主義は決して、衰へないであらうが、獨逸の覆轍の手本があるから、極端に馳せないやうに、着實の國民を作り、濶大の國民を養成することこそ、今日我が日本帝國の教育上、一大急務となさねばならぬ。

### 第三節 思想統一的の教育

前節に述べた通り、慘憺たる數字を統計上に見るやうな戦争が、何故に行はれたのであらうか。其の原因は種々あらうが主として、近代文明の特色たる組織力が、極度まで利用せられたること、及び

人生の利益と幸福とを目的として居る科學が、破壊的事業に應用せられたものである。而して、彼の獨逸が、毒瓦斯、又は、巨砲などに、人道を無視し、あらゆる横暴を極めたる行爲によりて觀察する時は、人間の道德心も、かくまで墮落其の極に達して居るやうに思はれるが、道德心未だ、全く、地に墮ちては居ない。大戦亂の齎したる教訓にや、國際聯盟自由平等など大に叫ばれ、教育の普及及び義務責任の觀念を強からしめた如くに感せらる、而して唯に然かのみならず國民としては一の目標、即ち理想を置いて邁進せねばならぬことを、自覺したのである。獨逸が極端なる國家主義を以て、國家の爲めに人民を、犠牲にすることを、躊躇しなかつた。さうして世人の評するが如く、獨逸の國家思想は、文化國家とも誇るべき、國民的文化の世界に超越し居ることを、獨逸の政治家軍人及び學者

等も、亦自ら是認して居たのである。従つて、獨逸國民の胸中には我が文化を以て世界に普及し、世界の覇者とならねばならないと、一種の妄想を描き、國家の爲には、一切國民の利益を提供して、顧みぬといふ氣象を、養成し、獨逸七千萬人は、其の官僚政治家によりて、殆んど、機械の如く動かされ、自らもそれに甘んじて、犠牲となつた結果、獨逸は見る影もない混亂状態に陥り、國民は新たに共和國の樹立を圖り、カイゼルは悲劇の主人公となつて、哀れ奈翁の最期の二の舞を演じ、所謂盛者必衰の理は驕れる平家のみが示さうやの有様に陥りしも、一國民を指導して、其の向ふ所に驕進せしめたるは、其の教育方針の誤りたるは別として、指導訓練のこゝに至りしは、取つて以て、教訓となすべきではないか。徒らに一種詭激の説に惑はされ、一時の浮説に左右せられて、動搖するが如き國

民の思想は、國家の爲めに、甚だ寒心に堪へない次第にして、教育方針の國民に、貫徹せざるの結果ではあるまいか。獨逸は祖國主義を以て國民を鼓吹し、米國はデモクラシー主義により、英國は、獨立自營、佛國は、自由平等を以て、國民精神を喚起し、確乎たる信念を以てしようとして居るのである。我が國の目標、即ち理想は何であるか。我が國民大多數の道德標準は、決して、高いとはいはれない。少數の智識階級こそ、多少倫理的觀念を有し、之れによりて行動して居るが如くなれども、或る信念の存するありて、然かするにはあらずして、個人的主義により、權力者の命令によりて、動きつゝあるの有様ではないか。さすれば、こゝに一大目標を立て、國民をして其の目標に向つて、勇往邁進せしめねばならぬのである。古來、我が帝國は、一の人格、即ち、皇室を以て目標となし、國民

の精神を統一して居りしは結構至極であるが、徒に、外來思想なりとて、我が國の目標、即ち、理想に衝突せざる所の思想をも排して漫然、目標論を説き、云々するが如きは、反つて、國家をして誤らしむるなきにあらざるかを恐るゝのである。戦後の國家經營策としては、國民の思想に侵入し來りたる外來思想も、其の採つて我が物となすべきものなるや、否やを、研究し、正當なる理解を與へ、我が國は皇室を以て一目標となし、國民自ら之れによりて進むより外はないといふことを、自覺せしむるやうにしなければならぬのである。單に、目標を立てるといふことは、容易に出來得るであらうが、思想の統一といふことは、容易に出來難い仕事である。或る人が云ひし如く、彼の露國の革命は、ツァール宮廷を中心とした、官僚派の極端なる武斷的保守主義の一勢力と、他の一方にては大多數

の無學文盲者を背景として居る、抽象的無經驗の極端なる過激派の一勢力との、二大勢力の對立である。又、獨逸の革命は、武斷的主義と民主的社會主義との、背反的勢力であることを觀來れば、思想統一といふことは、容易のことではないといふことが判るであらう。我が國に於ても、維新以來、種々なる思想の暗流は、文物輸入と共に、國民の胸中に流れざるを得ないのである。これは自然の數であるから、強いて抑へることは出來ない。故に、思想を統一するといふことについては、他に方策はない。これ又或る人が云ひし如く日本及び日本人の特長を、世界の特長に對比して、其の長短を知り而して其の思想と思想との共通點を握り、之れを評價して、自然的に國民の思想をして同一の方向に、進ましめたならばよいでないかと思ふ。要するに、我が建國の本義に據り長を採り、短を補ひ、彼此

の間に衝突なからしむるにあるのである。尙一步進んで、各思想を統一させるには、其の手段として、國民の智識を開發することの必要があると同時に、國民をして、確乎たる信念を持たせねばならぬ。信念信仰といふ堅固なる基礎を、築かせねばならぬ。是等の手段方法に關して、或は多くの自由と權利とを與へねばならぬ。而して、義務觀念を知らしむるにあらざれば、放漫に流るゝと唱道する人もあるし、又、思想統一は、單に、宗教の力を以てするに若くものではないといふ人もあるが、思想統一の如きは、法律上に言ふが如き、單純なる權利義務の關係とは異なるが故に、此の如き手段にては、到底思想の統一は出來ないと思ふ。又、宗教の力は實に、偉大なるもので、基督教が世にあらはれて、其の教義が一時、歐洲人を風靡し感化せし力の偉大なるによれば、或はある宗教によ

つて、一時、思想の統一はなすことが出來るかとも察せられるけれども、我が國民の如き無宗教同様、信仰心の觀念に乏しき國民に對しては、現實的傾向を理想的傾向に轉せしむる事は、殆んど、望むべからざることではないか。然しながら、戰禍の恐るべきを知るのみならず、我が國祖の尊ぶべきを知り、各其の祖先を敬せざるべからざること、覺知するの國民なるが故に、教育にして其の道を誤るなければ、彼此思想の長短を取捨し、彼此の調和をはかることは、容易であらうと思ふ。故に教育者は宜しく思想問題を研究して、これが可否を判別する頭腦が明確でなければならぬ。新思想にのみ憧憬して、我が國固有の思想を忘却するが如きはよろしくない。舊を去り新に就くは、人生自然の傾向なりとはいへ、外來思想も悉くよいものとは限らぬ故に、一時世界を風靡して居る思想であつても、

時の流行に過ぎないので、必らずよいといひかねる者も澤山ある。故に、教育者、先づ、自ら覺醒し、其の信仰するところを以て、幾多の思想を量定して、正當の理解を國民に與へるやうに、國民を導くのが教育者の最も大いなる任務であらう。さうして、思想の統一が圓滿に出来れば、國家の安泰をして、益々安泰ならむしることが出来るであらう。

#### 第四節 教育の社會化

教育をして現代に適切ならしめること、即ち現代生活に接近させることは當然のことで、今更事新しく言はなくても、幾多の教育學者の唱へて居るところであつて、實際教育の事にあづかつて居る我が教育者も、このことを知つて居るだらうが、實際行はれて居ないやうである。生徒をして、實社會に不必要なる迂遠なことを、學ば

しめて居るやうなことが、數多くあるのではあるまいか。教育は出来るだけ活社會と接近して、教授をなすべきである。算術を教ふるにしても、時々、出す應用問題中、物の價を用ふるものであつたれば、時價を以てして、社會の事情を知らしめ、經濟觀念を強固にし歴史に於て、佛蘭西のカステルノー將軍の義勇愛國の事を教へるにしても、該將軍の事のみについて教授すれば、事足りりとして居るからいけない。世界に於て、カステルノー將軍に等しき行爲をなせし人(乃木大將、ルウズヴェルト等)は、何人であるかと質問して、常に現代と密接なる關係をつけて、教授をするやうにしなければその教授は死物であつて、何の効果もなく、生徒の興味を惹起せしめること少く、且つ働きなき人間を、作り出すといふことになるのである。歐洲戦争も落着したる今日、歴史や地理の教授をするには、大

分訂正増補しなければならぬし、物理化學に於ては、日に月に、發達進歩し、新發明新發見ありて、一日も進歩の歩を止めて居ない學科なれば、特に教師たる者は、一層新しいところへ眼をつけて、新智識を得、以て、今日日常の生活に應用し得べき事に就いて教授し家事科等に於ても、味噌汁の泡をすくつて食ふことのみを知らしめては、現代の普通の家庭にては、到底實行し得ざること、一生涯味噌汁の泡をすくつて食ふことが出来るか、どうか疑はしいのである。故に、かゝる高等なる生活狀態を會得せしめることも必要であるが、現代の世間一般の生活程度を察して時に、玄米とか外米等の炊き方等についても教授されたいのである。習字の如きも、從來の毛筆習字を主とすれば時に、ペン習字を多少併せ課せらるゝやうにし、又國語教授に於て現代に適合せしめようとするには、其の

方法、實に多方面にして、外形としては新聞雜誌に見ゆる新造語新熟語を、讀本中にある語句に關聯せしめて教へ、教師の塗板に記す文字を、時たま、草書又は行書にて書き、かゝる字體の文字を讀み且つ書くことに習熟せしめ、又時には新聞或は雜誌の文章を示してこれが解釋を求め、而して世界の趨勢、世の中の表裏を知らせ世態人情を會得せしめるがよい又近來或る一部人士に唱導されつゝある、ローマ字の如きも、重大なる國字問題にして、未だ其の可否は知らんけれども、現に各停車場の驛名札の如き、各商店の看板のごとき商品のレツテルの如き、擧げ來ればローマ字の實際に用ひられてゐるものも中々少くない、従つて一通り其の讀方や書方を心得置かなければ、今迄普通の漢字を知らない者が、受けたと同じ程度の不便を感ずるに至るべきは云ふ迄もないことである。但し英語の知識を

以てすれば、直にローマ字位は自由自在に解することが出来ると思ふ人もあらうが、それは甚だ早計なことである。ですから、ローマ字とは何物なるかといふこと位は教へて置く必要はあらうと思ふ、其の他修辭上の問題についても、一通り講義して置くがよからう。又時には一定の時間を限りて、極く短時間の内に手紙を書かすやうなことも、教育の社會化の一つである。さて内容としては、道德的の教材に對しては、飽く迄徹底的に批判を加へ、實例を示し、實行の域迄進めるやうにし、思想問題に於ては縦横無盡に敷衍し、説破し、現時の思潮と比較し批評して、我國特有の文化あることを知らしめ、我が同胞の歩むべき道を明示するやうにしなければならぬと思ふ。又圖畫の教授にしても、日本畫又は洋畫のみを授けず、繪畫といふことについての一切の概念を教へ、一口に日本畫といへど

も支那の南畫か、純粹の日本畫かの識別が出来るほどの頭を持つやうにしたならばよいでせう。其の他の學科を教へ其の他の事件について、この現代に適合せしめるといふことに關しては、講究すべき點多々ありませうが、要するに現代に適合するやうな教授をするにはどうしたらばよいかと言ふに、先づ第一に教師自ら現代に遅れない人間になるやうに、新聞に雑誌に新刊書に、常に眼を注いで世界の趨勢、世界の文化の程度を知るといふことに努めなければならぬ。如何に知識が豊富なるも、現代に遠ざかつた教授をして居ては駄目である。教育者は、現代の事物を兒童の能力個性に適應せしめることが必要である。土地の状況に適合せしめるとかいふ事は、よく言ふことで相當に苦心もして居るやうだが、現代に適合せしめるといふことについては、毫も口にしないやうである。あゝ、何ん



といふことぞや。

これまでは教授上に於ける方面について陳べたが、それを今少し範圍を廣うして考へるに、彼の米國シカゴ附近なるグーリー市に設置せられたる、所謂グーリーシステムの如き、最も進歩せる一種の職業教育にて、又、一面よりこれが出現は教育の社會化と看做すことを得。而してこのグーリー式學校の設備を言はんには、普通學課を教授することは勿論なるも、殊に、手工博物の設備は多方面にて、印刷室・機械室・鑄型室・タイプライター室・裁縫室・賣店等ありて、手工等は其の地方の専門家を招聘して手をとりて教授する由、故にこの學校は工場の小模型家庭の小模型、社會の小模型と謂つてよいでせう。そも、職業教育は見やうによつては、個人的教育主義といつてもよい。又實用主義は、物質主義即ち功利主義に陥り易いから、何等か

の理想を條件とすることを以て進む職業教育でなければいけない。ジューイー氏も言ひしが如く、社會的關係より離れたる知識の獲得ほど悪しきものはない。仕事をすることはよいが、仕事を社會に役立たしめないやうな教育は、施さない方がましである。故に、實用教育を盛にし、よくこの點に留意すべきは勿論であるも、普通教育にても亦この社會といふことを忘却してはならないのであるから、今少しグーリー式の學校に學んで、學校の仕事を開放し、教師が全く無關係で、級長副級長選舉法についての研究購買部に關すること學友會雜誌の編輯などを兒童自ら企圖し研究させるやうにして、教師はたいそれを監督するだけにし、或は時々社會の事業なる赤十字社・孤兒院・新聞社・病院・種々なる工場などを參觀し、又は手傳はせ、或は時々科學的に社會の複雑なる表裏を説いて社會學の一端を知らせ、

或は教師は多少指導の任にあたるのみで、兒童自ら少年少女の一團體を造りて活躍させる等のことをしたならば、依頼心を除去し、獨立自治の風を養成する一助ともなりて得るところが多いと思ふ。但し素より純然たる職業教育にあらざれば、たゞ職業的知識を授け出來るだけ社會化するといふ點に留意すればよいのである。

以上はたゞその一般を明かにしたのみであるからして、よくこの根本義を會得して、處に應じ時に應じて、臨機應變の處置をとりての教授を望むのである。

## 第二章 教育の方法

### 第一節 國體尊重の念を鞏固ならしむる方法

曩に思想の統一と題する章で述べし如く、我が國民をして同一步調に出でしむるには、建國の由來を明かにし、國體の根基精髓を理解せしめ、熱烈なる愛國心を抱かしめ、更に、この精神を海外に發揮宣揚して、以て、世界の道德文化に貢獻するやうにしなければならぬ。若しこの精神を缺除して、國家的觀念なく、個人本位であつたならば、同民族間すら共同して事をするには覺束ないから、實際に道德なしなどといふ狭き了見を止め、自國を愛する心を崇高にして、他國をも愛撫して行けば眞の精神的一致と云ふことも出來、永久の平和を期することが出來るのである。而してこの愛國心を養

成するには、國體尊重の念を鞏固にするにありて、更に敬神崇祖の美風を益々發揚し、且つ其の普及を圖らなければならぬ。さて此の美風を振興する方策一ならず。社會的施設としては、神社の壯嚴を維持し、祭祀は出来るだけ嚴肅に行ひ、さうして時々祭祀の本旨を周知せしめる爲めに講演を開き、又は、國體の尊嚴なる所以、即ち天祖極を建て統を垂れ給ひ、列聖遺訓を奉じて國家に君臨し給ひ、寶祚の隆んなることは天壤と窮りがないことや、皇國と臣民との關係や、忠孝一本の良俗などに關し、地方の青年會・婦人會等の社會的團體が、率先して、何かの機會に説話して、この精神を一般人民に鼓吹する等もよいでせう、學校教育に於ては、主として修身の教授により此の精神を鼓吹し、國語歴史などによりて一層濃厚ならしむる様に、常に圖るべきは勿論にして、目標を萬世不易なる人格者

たる神即ち天皇に置いて、之れを説述するはよいが、全國の各學校が其の下し給うて居る 陛下の御眞影を兒童に拜謝させるは、一ヶ年に僅か二三回にして、其の他は絶対に拜するをさせないのであるが、私は甚だ遺憾に思ふ。登校の兒童をして毎朝 今上陛下の御肖像をば、拜せしむる様にしたと思ふのである。然るに校長室の一隅とか、又は物置同様の場所へ御安置申上るのは、何のことが解釋に苦しむのである。世界に比なき國體を直話するのよいが、眼のあたり其の御肖像の前に立たしむれば、自らいひ知れない崇嚴の念に打たれるものにして、兒童の胸中に國家と云ふ觀念を、植付ける力は偉大であらうと思ふ。

翻つて思をめぐらせば、各自の家庭には、各々信仰すべき神佛が祭つてないところはない。即ち佛教信者は佛を安置し、基督教信者

は聖房とて、そこにキリスト及び亡き父母などの寫眞を掲げて、毎朝毎夕禮拜するではないか、然らば學校に、佛間聖房に比すべき室を作るも亦よからずや。こゝに於てか、私は全國の學校に向つて、陛下の御眞影を奉安すべき且つ全生徒の這入るだけの廣さの室を要求したのである。さりながら目下の所、到底こは財政の許さざる所であらうからして、一學級凡そ五十人前後の兒童が這入れるほどの室を建設し、毎朝一學級づつ交代にて禮拜せしめるやうにしたい。但し、今上陛下の御眞影及び天照大神宮(幣)を是非御迎へしたい。尙叶ふならば神武天皇陛下の御肖像をも、合せ御祭りしたいのである。然して其の奉安する室は、普請といひ、裝飾といひ、及ぶべく神聖な崇高な氣分の漲る様にせんことを希望するのである。尙私の理想としては、生徒をして毎朝禮拜せしむるのみならず。兒童が何か不

都合な行爲をした時などは、大君に其の罪を謝すべしとて、たゞ一人この室へ十分間も入れて置いたならば、精神上に一大刺戟を與へ兒童をして自ら悔悟させることが出來て、訓育上の一方法だと思ふ。遠く父母の膝下を走り、他郷に遊學し、冷たき寄宿舎生活をして居る生徒などの悲しき時、或は試験の首尾よくあらんことなどを、父母の寫眞に對して念じ、又は父母の健康ならんことを天に祈る云々のことを、人より聞きもし、又直接に見もし、又時に生徒自身の告白せし文章によりて、此の愛すべき精神の横溢することを知つて居るから、此の精神を導いたならば、國家尊重の念を強めることが出來るであらうと信ずる、故に私は、國體の尊重すべき所以を説くと同時に、一方に於て以上の如き事を實行されんことを切望して止まないものである。

如何なる不徳漢なりとて、佛壇の前に坐り蠟燭を點じ香を焚いた時には、一點の邪心もなく妙に精神が緊張するものであるから、よしやこの室を出づれば、直に悪心満々、人を害し人を傷くることに焦慮する者にも、佛壇の前に坐つて居る間だけは、何のたくらみもなくなるものであつて、精神上に變化を呼び起すことは何人も知る所である。故に神聖なる室に御眞影を奉安し之れを拜せしむるなどは、自ら國體尊重の念を一層鞏固ならしむることを得るであらう。

## 第二節 獎勵すべき獨創的教育

驕れるもの久しからず、唯春の夜の夢のやうである。さすが猛き獨逸國も、遂には亡びんとし、獨逸國民は今や新たな生活に入らうとして努力して居るが、彼の戦闘振りを見よ、兎に角よく戦つたを謂ふべきである。前にも云ひし如く、獨逸國民の使命は我が文化を

以て世界に冠たらしむることであると信じ、専ら國家の能率を極度に發揮せんとして科學力を悪用し、あの巨砲を以て聯合軍に當り、一發數百人を斃し、或は毒瓦斯を發散して數千人を一度に窒息せしめ、或は巴里の暗夜の空に忽然と惡魔の眼のやうな爛々たる一點の光を輝かして、プロペラーの音物すごく、ツエツペリンの飛行船來たりて見るまに爆彈を投下するや、數十階の堅牢なる建築物を地下室までも、粉微塵にするすさまじき勢に、巴里の人心は戦々競々として、これが襲來を恐れ、生ある心地もせず、日々の生業にもいそしまず、流石の不夜城たる巴里も暗黒となり、巴里生れの婦人をして月に滿虧あることを發明したと言はしむるに至つたといふことであるが、この時聯合軍にありては、之れに對應すべき巨砲なく、毒瓦斯の發散を知らず、ツエツペリン飛行船の構造を知らず、獨逸に再

三これを以て苦しめられたる揚句、やつと墜落したる彈丸の端片や飛行船の缺片によりて其の構造を承知したのであるが、獨逸が兎に角他國より一步先んじて新しき試をして居たのである。又今回獨逸が戦争を始めてより、種々の藥品の輸入は杜絶したので、我々は病魔に襲はれて醫師に行くも善き藥品はなく、又染料の缺乏により染物料の暴騰を來した。併し我が國にては其のお蔭を以て、不完全ながらも幾多の發明工夫をしたのであるが、矢張獨逸品より價格高品質劣つて居るものが多いやうであるといふことであるが、是を以て觀れば、獨逸國民は獨創的能力に秀で、居たと思はれるのである。英米の教育は立派なる品格を備へるといふ點に於ては、獨逸に勝つて居たかも知れないが、實用的教育、殊に、獨創的方面に於ては確に劣つて居たと思ふのである。故に我々はこの活きたる教訓を心中

奥深く刻みつけて、何をいつても獨創的能力を養成しなければならぬ。如何にしたなればこの目的を達することが出來ようか。要するに、知識は自ら勉むることなくして得ることは出來ないから、徒に教師の講義を聽くを能事としてはならない。講義を聽く前に必らず自分自ら講義者たるが如き觀念を以て文章を解し知りがたき字は辭書によつて調べる必要である。金錢物件は奪ひ取る事が出來るけれども、知識は決して盗むことは出來ない。必らず自己の心身を勞せねばならぬ。心身は使用すればするほど健全に發達するものであるから、人に頼つて知識を得ようなどいふことでは、到底獨創力は夢にも見られぬことである。所謂注入主義の不可なる所以も亦この邊にあるのである。教師たる人は及ぶべく生徒を自發的に導き生徒自ら何事も爲し得るやうに教育をせねばならぬ。

現時我が國の教育は、制度に於ても設備に於ても。多少非議すべき點はないが、形式に於ては殆んど完全の域に近づいて居る。而して、今や新に列國の長を取り短を補ひ、徒に模倣することなくして、我が國の文化を發揚すべく、獨創的能力養成といふ點に着眼したのは結構である。作文の例を舉げんに、作文の教授にては多くの場合、文題を揭示して其の題の下に一文を綴らせるやうにして居るやうであるが、是れにても勿論多少は獨創的能力養成の一助となり、又作文指導上の利益もあり、延いては個性等を見る方便ともなるのであるから、この方法素より必要なも、これのみにては興味を感起し、生徒の獨創力鍛錬の方法ではない。故に、時には生徒各自の選ぶ題によつて書かせ、或は教師に於て一文章を朗讀して其の文章に對する題を選択させ、且つ其の大意及び感想を綴らせ、

或は書翰文を読み聞かせて其の返事を認めさせ、或は一の拙劣なる文章を掲げて其の文の悪しきところを訂正し、且つ全文の批評をさせる等の方法を用ふるは、獨創力養成の一方法である。又生徒の成績品に對して各自見るところの感想を書かせるなどのことも、私は確かに獨創力養成に力ある方法と信じて居るのである。國語教授に於ては、生徒等に讀み且つ解釋が出来るといふのみならず。所謂動的教授にてお互に讀み且つ解釋をさせ、文學的にこれを解剖して、生徒をして文章中の人物と同化し、文章中の土地に彷徨して居る思をさせるやうにし、それに等しき人物、それに等しき土地を既知の知識に訴へて聯想せしめ、又は一文を讀了して後、この文をかく改正せば如何なる影響を及すかなどを質問するのである。例せば——  
倫敦の夕の六時頃、倫敦橋の袂にイみてこの流のさまを見んか會社

問屋商店銀行役所などの戸口より出でし、灰色の顔したる通勤者――云々の文について、赤色の顔したる通勤者と訂正せば悪いか、なご、質問して頭を練らせるなど、又填字法などもよいが、これと相似通うた方法ではあるが、一文章を書いて、其の中の一二字を草書で記載し置き、又は教科書中の未知の文字に對して、前後の文章より推して、其の草體の文又は未知の文字を判讀せしめ、然る後教師が正否の判断を下すこと、又は既に教へし數章の中より、解釋に苦しむ語句、或は平易過ぎて日常用ふるものなるも誤り易いと思はる様な文字を抜粹して教科書の文章とは全く別の意味をなすやうに、それ等の文字や語句を綴り合せ、一の完全なる單文を作りてこれが文意を質問すること、又は一文字より幾多の熟語を創作せしむることである。書物を読み解釋力を富ましめ、作文法に巧ならんとす

るあらば、其の著作者の位置に立つて讀み、且つ起草する考へを以てしなければならぬ。歴史を教授するにも、一戦争をした英雄の言行について教師は其の當否巧拙を述べずに、生徒自身をして判断せしむるがよい。身を其の時に處き、其の事に遇ふことを思うてこそ、實用的の知識が得られるのである。例せば有名なる關ヶ原合戦の記事を讀むときは、吾をして石田三成ならしめば、吾をして徳川家康ならしめばと、一々原因結果を案定して苦心の跡を察するのである。又豊臣秀吉が木下藤吉と稱した頃、今川義元に仕へ優遇せられたといふほどではないが、相當の位置に用ゐられて居るにも拘はらず、去つて織田信長の家奴となつた、其の心事の尋常一様にあらざるを知ると同時に、吾も亦時には此の行動が爲し得らるゝや否やを體得するのである。更に一例を擧げんに、秀吉が樂田に於て、池



田一徳齋等が長湫で家康の爲めに殺された事を聞き、怒髪天を衝き、且つ機乗すべしと爲して家康を追ひかけたが、家康の小牧山に歸り陣容を整へたのを見て、容易の敵でないといふことを察し、一の弔戦さへもせずして、大兵を率ゐて大垣に引きあげ、家康に對し和議を申込んだ如きは、秀吉の秀吉たるどころなれども、吾は然かせざるべし。又は然かすべしと。觀察し判定するのである。歴史は常に身を其の場所に置き、其のことを自ら處理するの覺悟を以て讀まねばならない。獨歴史ばかりでなく世の事變に遭遇し、單に今日は雨なり、今日は晴なりなど、目前に見ゆる現象を以て満足することなく、是非其の原因結果を推究するやうに心掛くべきである。然るときは世に、彼は經驗者なりなど、いつて實務にあたりし人を稱賛すれども、日常の細事をも緻密に觀察して可否を判定するやうに心

掛ければ、無經驗者と雖も其の知識は經驗者と大差はないのである。況んや書を讀んで常に故人を友とするものに於てをやだ。

次に圖畫手工などは最も獨創力養成に適したる學科であるから、教師は充分にこれが力を養成することを工夫しなければならぬ。他の學科にても同一であるが、先づ一の缺陷缺點ある問題を示して、それが改良改善の個處を考案せしめるやうにしたいのである。然るときは、獨創的能力が自然に増進するからである。教材を傳達し、被教育者をして單に之を受容せしむるのみにては、所謂注入教育にして應用的の力量を養成する事が出來ないから、被教育者に、隨意に進むべき餘地を置いて、各自既得の知識によつてこれを解釋し、之を完全させようとする、自發的自動的の啓發法即ち開發教授を加味してしななければならない。殊に生徒が質問などを發する場合には、

教育者は最も獨創的知識の開発に留意して兒童の記憶を試み、且つ之れを啓發せしめようとの趣意により、類推的に曉り得るやうにせねばならぬ。教育者獨活動して喋るのみにては用に立たない。そんな教育者は人間としての教育者ではない。殆んど蓄音機に等しいのである。加之生徒をして誦讀などに苦しましむるは思はざるも甚しい。所謂一隅を擧げて三隅を反せざる者は、復び教へないと、論語にもあるが、兒童に對しては一事を擧示して、他の類似のことを自發的に工夫發明するやうに導かなければならない。これは圖畫手工等の教授に於ては一層大切のことである。

### 第三節 徹底的の教育

徹底といふ語は、現代教育革新の流行語となつて居るが、中々この徹底といふ語意を自覺し實現することは難い。既に幾多の識者の

講究し腦を悩まして居るところで、私が今論じつゝある教育改善問題も詮じつむれば徹底を期するといふことが主たる目的中の目的である。マンハイムシステムを初めとし、學級論制に関する色々の試も、要するに兒童の能力を中心とした、教育の徹底を期する爲の企である。又分團教授も徹底に關する個別的取扱の一方法である。又米國に實生活教育の徹底として遂にゲーリーシステムを出現したのもそれである。

さて教育をして徹底的ならしむるには、先づ高尚なる人格と豊富な學識ある教師でなければならぬ。而して人格より生ずる愛情といふことについては、我が教育者はどうであらうか。生徒に對して冷かなる情を以て接しては居りはすまいか。威ありて猛からざる風ありて、生徒と人格的接觸を以てすれば、そこに眞の教育といふ

ものが生れるのである。但し其の愛情は、偏頗なるものではない。個々の生徒を我が手足の如く愛しなければならぬ。かく平等的愛情ありて生徒と疎隔しないことになれば、教育の術といふ方面に於ても遺憾なく發揮することが出来、よし教授法を心得て居なくとも、所謂中らすとも遠からずであつて、生徒の個性も十分知ることが出来、興味を誘發させ周到なる自發的自由主義の教授をする事を得るのである。ソクラテス謂らく「余は智識を興ふるにあらず。知識を産ましむる産婆なり。産むべき力は素より向ふの人に備はる。教師は唯之れを産ましむる助を爲すに過ぎず。」と。眞に然り、教育の眞意教授の秘訣はこれのみなれども、徹底を望むには、今少し教授といふことについて深く研究しなければならぬ。國語の教授などに往々文字のことを輕んじて、一向に其の文の内容を取るとか、

思想を味へとかとて、教師一人喋り、加之其の喋るや、教材の文章に適切なることならばまだしもだが、何等關係なきことを長々と説述するも、勞多くして效はないであらう。又生徒をして辭書を用ひしむるは素より可なるも、教室に於ては、兎に角教師が指導しなければ文字といふことに對して、徹底的に應用自在といふまでには至らないのである。かやうな仕方は、教授の目的論からいへば、一を知つて二を知らないやりかたではあるまいか。教授の目的は、實質的陶冶即ち心の實質を豊富にする方面を重く看なければならぬ。換言せば有用なる知識技能を成るべく多く授與するを以て、教授の主目的となすのである。併し教師が自己の知つて居るまゝに、少しも多く少しも早く教へようとして、世の注入主義となり、知識技能の分量のみ多くなつて心の働きの付かない弊に陥つてはよくない。急

がば廻れ主義でやらなければならぬ。あまり注入主義になると課業の過多を叫び、時には教師に對する反抗を起すやうなこともないとは限らぬのである。今一つの目的は形式的陶冶である。心の働きを付ける心意の發育鍛鍊を意味す。詳言すれば、觀察を精細にして想像を確實豊富にし、又、感官を練磨して感覺知覺を鋭敏ならしめ、而して善く概括し正しく判断して意志を鞏固にし學習の興味を悟らしめて眞理を探究せんとする傾向を附與する方法であつて、先きにいうた國語の教授に、文の内容思想についてのみいふも、この目的論者より云へば適當なる方法である。去りて形式的陶冶のみを過重すると、其の人は社會に於て廣く内外の事情に通じ實際生活を完全にするには出來ない。極めて不健全な人間としかならないのである。故に眞の人物を期待し徹底的の教授をするには、以上の二目

的を調和して、單に知識技能の鍊達整理に止まらず、自學自習の意志を養成し意志を鍛鍊すべきである。小學校にては實質的方面のみに意をそゝぐ傾向があるし、中等程度の教師になると、何れか一方に偏して居る人が多くあるかに思はる。この二つを調和するといふことは、當然判りきつた事であるが中々實施し難いことだから、教育者はこゝに思ひをめぐらさんことを必要とするのである。

次には、教授の方法についてであるが、心理的法則によつて其の發達の程度に適應すべきと同時に、論理的法則によつて教材を傳達すべき正しき順序を考へてしなければ、是亦徹底といふことは望み難いのである。殊に論理的方面中なる、分解と綜合・歸納と演繹といふ問題につれて深く考へて居る人が少ないやうであるからしてこのことについて簡単に言へば、教材傳達の順序は分解的たるか、綜合

的たるかでなければならぬ。分解法とは一事物を其の各部分に分つ方法である。綜合法とは個々の部分を明瞭にし、個々の屬性を究め之を總括して一全體の觀念を得る方法である。歸納法とは個々の場合より普通に進み、概括したる普通の結論に達する進歩的方法であつて、演繹法は已に定立したる普通の結論より特殊に及ぶ退歩的方法である。而して歸納法は重に分解的に進む(英國學者の説は之に反す)けれども、歸納演繹と分解綜合とは時に全然一致するものでないといふことを知つて居なければならぬ。以上は教授上徹底を期する爲めの目的論及び一般的方法について申しましたが、以下少しく教育上に於ける方法について詳に述べよう。教授はどこまでも兒童本位にして、自學自習の意志を養成するには、書取をさせ答案を書かせても、たゞ檢閲又は誤謬の箇所を指摘するのみにては勞多くし

て效はない。教師自ら其の誤謬を訂正するも時にはよいが、生徒自ら之れを研究し訂正させるか、又は同級生と交換して訂正させ、教師再び檢閲せば意義あるものとなる。作文教授にしてもさうである。毎度添削するのみでは如何に丁寧添削しても、生徒の智能を啓發することは不充分である。殊に訂正したものが兒童の思想に合はなければ、如何に徹底的に訂正しても效はない。又生徒は動もすると、折角添削をしてやつてもよく讀まないやうなことがある。否大抵は充分添削された理由について考へる者はないといつてもよいでせう。故に綴方訂正無用論を眞面目に論ずる人さへある。ヘル氏は、作文を悉く訂正するは訂正せぬに同じだとも云つて居るが、これも全部首肯し難い。故に時には誤字・脱字・文法上の誤りとか、又は修辭上注意の明瞭を缺いて居る所等を摘出して自ら訂正させ、或は一學級四

十人あれば、それを分ちて三人位づゝ組ましめ、相互に研究し合うて不完全なる點を改正させ、教師再び檢閲の勞を取り、又は習字圖畫等の技能的學科のものは、一般生徒の成績を見せしめて良否を判別する批評眼を養ひ、善良なるものに模倣せんといふ心を唆るも、或は一方法でせう。「如何なる人が視學又は學校長に適するか」といふ題下にて述べし、作文習字などの生徒の成績品に對し、生徒をして一つの感想文を綴らせる云々の事も、徹底的の教育法だと思ふ。然るに、作文圖畫など、書かせるのみで添削訂正しないばかりか、讀み且つ見もしないで、生徒の手に返却し、又は紙屑籠に投げ込みて顧みないやうなこともある由だが、生徒をして勉強努力の精神を挫き徹底なごゝいふことは思ひもよらぬことである。

主智教育受動的學習權威教育は徹底的の方法でない。辭書や實驗中

心では、眞の自學獎勵法ではない。又壓制的の教授は絶対に避くべきである。教師と生徒と其の知識程度を比すれば、非常な差があるべきである。ですから教師が教師の位置に心を置いて、兒童に對したなれば、満足な教授は出來ない。これほどのことは知つて居るだらうと思つて居ることも、聽いて見ると兒童には判つて居ないことがある、兒童の能力程度を圖らないですると、六つかしい語句を用ひて談話し、高尚過ぎる問題を提出したりなどして、徒に時間を空費し、何の効もないことがあるからして、教育者は兒童と位置をかへて、兒童に對すべきである。而して、其の間に愛といふ麗はしい情が流れて居て、優者長者の態度を持して生徒を壓制壓迫するといふことがなかつたならば、生徒は自由に質問をするやうになるのである。私が試に數月間、殊更に解放的に自由に導いてみました。生徒は

新聞雜誌及び指定教科書意外の書物の文字文句について聞いたり、又は今朝學校へ来る時電車の中に書いてあつたが「斯界のオーソリチー」とは、如何なることかなど、頻に質問に来る。又一生徒質問に来て言ふやう様々に「といふ語を、昨日名詞だと先生はおつしやつたが歸宅後どうしても合點がゆかないから種々取り調べたところ、言海(辭書)に副詞とありましたが無れが正しいか……私はそれを聞き副詞だと云つて置いた心得ですが……萬一名詞など誤つていつたらならば、皆さんに取消改正をしなければならんから、同級の方々に聞いて下さい」といつたら間もなく、笑ひつゝ再び來り、私が聞き違ひでした……といつて來た事があつたが、生徒は眞に研究し勉強する氣になつて居るのである。故に導き次第でどうにでもなるのであるから、生徒の質問は務めて歓迎すべきである。不審の點が判るや

うになつたなれば、其の事に半徹底したと謂つてよいのである。かやうに解放してみますれば、生徒は喜んで何の窮屈な思ひもなく質問に来るのです。かくの如くしたならば、熱烈なる研究心を喚起し、合理的研究の方法を體得せしめ、自己の力で其の向上發展をはからせることができるであらうと思ふのであります。學習したこと全體について、判つたやうな判らぬやうな、質問したいが無處を尋ねたらよいか、それさへ判らず茫然たる思をさせないやうに致したい。且つ又生徒が質問に来たならば、態度語調とも及ぶべく、穩和を以て接すれば、終には徹底的教育が出来ると思ふ。

次には、融通の利くやうに教へるといふことである。徹底せしめんとする事實は、普遍的で、偏狭であつてはならない。例せば、茲に一女生徒ありて、余といふ文字を使用して作文を書いたとする。

その時に、女子は余などいふよりは、寧ろ私といふべきであるとか。又は俗語の「いけない」(不可)といふ語はよくないから、云々と言はんより、この語は元來禁示的の語さうしてはならぬ」といふ意と「不可」即ちよろしくない」といふ意と不可能即ちできぬ」といふ意味があると、教へてさへ置けば融通が利くのであるまいか。又は女生徒が、文章の語尾を、何々したのだといふ調子で書いた時、女子は「御座います」「あります」といふ敬語を使用すべきであるとして、其の不可なる理由を話さず禁止するより、生徒に毎日教へつゝある讀本の教科書中には、女子にして「何々した」といふ語尾の文章は多々ある。下田歌子女史安井てつ子女史等の文章にはこの調の文が至つて多い。又世に流布されて居る雑誌には、かゝる調子の文が往々あつて生徒の眼に映ずるから、教師の語と矛盾が生じ、生徒に眞の合理的の理解を與へ難く

且つ融通の利かない狭い知識を授くるといふ結果になるのである。ですから寧ろかゝる場合には、女子たる者は出来るだけ注意して上品な優美な語を常用とすべきである。故に「私」とか「御座います」とか「あります」とか云ふ言語を用ふべきであるが、文章としては、その書くべき内容(思想)形式(文體)によりて女子と雖も「余」あつた」といふ語句を使用しても差支ない。元來文章の語尾を「……」がそれだなど、だ主義を主張した人は長谷川二葉亭であるし、「何々です」といふ、で主義は山田美妙、尾崎紅葉はである主義を主張した鼻祖で、言文一致の新傾向を開いたのであつて、これ等の句調の起るやうになるまでには、幾多の波瀾曲折を経、俗であるとか、下品であるとか、批難されたりしたものであるが。今日ではこれらの句調を用ひる人多く、文章は俗を専とするのと、雅を専にするのとの相違点より來



たものであるといふことを知らしめたなれば、聊かの矛盾撞着なく徹底させることが出来るだらう。これを以て、其の他の學科にても推して知ることが出来るだらう、冗煩ながら私は再び言はなければならぬ。學識ある善良なる教師にして、徹底的教授は望まれるのである。教師の實力がなかつたなれば、如何に方法がよくても駄目である。裁縫の教師が生徒に裁ち方を間違へて教へ、新衣裳に縫ぎなどを造らせることは折々聞くことなるが、教師は實力を豊富にすることが最も必要である。而して人を教ふる前に、先づ自分の意見をもたなければならぬ、ドストエフスキ―云ふ、自分自らの意見を持つ前に、先づ自ら働かなければならぬ。自分自らの仕事をもちなければならぬ。事物に對する自分自らの知識をもたなければならぬ。自分自らの經驗をもたなければならぬ、何にし

る無より有は生じない。働きさへすれば自分自らの意見も出来る理由である。意見が出来れば人を十分教へることが出来るのである。故に「汝自らを知れ」といふことを以て、學問研究の第一歩とすべきである。

徳行の本は情意なれども、知見を開き、徳の何たるかを明知せしめ、徹底的に知識を與へておかなければ、眞の徳を知り實踐躬行をすることが出来ぬのである。知見判断なき行爲は盲目にして、畢竟善惡の行は、知見の明なると明ならぬとに本づく、人の惡を爲すのは、知識足らず誤りたる判断よりするが故に、人誰れか知つて居ながら自ら惡を爲すものがあらうや。その知りながら惡を爲すといふ者は、實は猶其の知見の明かでないところがあるからである。眞に徳を知つたならば、直に徳を行はなければならぬのである。ソク

ラテスは「徳は知なり」と絶叫して居る。王陽明の「知行合一」説も殆んどこの意と同様である。徒に忠君愛國義勇奉公をせよと教へたところが忠君愛國の忠君愛國たる所以、義勇の義勇たる所以、奉公の奉公たる所以を明知しなかつたなれば、眞の忠君愛國の念も起らず、勇を奮ひ義を行ふことも出来ぬ、奉公を實行することが出来ないものである。尙これらの諸徳を徹底的ならしむるには、善とは何か、徳とは何かといふ根本原理を示して、演繹法により幾多の諸徳を會得させるやうにすれば、忠君愛國の念も強くなり、孝行の實行も出来て、應用自在、其の盡くるところを知らないといふ工合になるのである。蓋し吾人は、須らく明白なる知識を以て之れを理性に訴へ、自身の悟つて居る所を以て進退すべきである。然かすれば、歐米の思想、雜然と輸入して來ても、我が國民の思想に動搖を與へる憂は

ない。現今彼の世界の思想界を風靡して居る。自由平等主義についても、明晰なる知見道徳的批評を下す脳力がなかつたなれば、世俗の浮説に惑はさるゝに至るのである。是に於てか、教育の必要を感じ、具體的説明をして置きました故、あくまでも徹底的の教育を施すやうにしなければならぬのである。

#### 第四節 自由平等の訓育

訓育とは、道徳的品性を陶冶する事であつて、教師たる者は、教授の間にも遊戯の間にも常に意を用ひて兒童を觀察し、善良なる方向に進ましむべきである。然してこれが目的を貫徹するには、規則と云ふことが必要になつてくる、すべて一定の規律によつて行動せしむべきである。故に規律を定め命令を下す時には、慎重に考慮し、外間の形式に依らず、生徒の體力能力に不相應なる重荷を負はしむ

るやうなことをせず、何事も生徒本位に、生徒の大多数の利害得失を圖りて爲すべきである。然れども、一旦規則として定めたる事、又は生徒と約束したる時は、教師は必ず之れを確守し、生徒をして實行せしむべきである。例せば生徒に或る成績物を何日迄に持参すべしと言ひ渡し置くも、其の約束の日に持参したる者は僅か四五十人中七八人にして、其の後追々持参し來り、五日も十日も後に漸く全級生徒のが揃ふといふ風であつても別に小言を言ふでもなく、持参し來たれば之れを受取り置くが教育界一般の習慣のやうであるが、これは生徒の機嫌を取らうといふ考か、又はかくしてこそ眞の自由なる訓育なりと信じて居るか知らないが、是は眞の自由にする意ではない。無規律なる我儘を助長せしめるのである。泥んや結局持参しない者あるとも、其のまゝに差し置くが如きは無規律も大抵程が

ある。又一度約束した日に持参しないと、生徒が涙を流して持参するとの出来なかつた理由を陳述し詫びるもこれを聞き入れず。嚴罰に處し、授業後一時間も二時間も學校に止め置いたり。又は殴打こそはしないが机等を鞭を以て叩き、其の音で威嚇したりするが、兒童の頭脳には體罰をしたも同様に響き、且つそれも度重なれば習慣となりて何等の影響をも與へなくなり、それ、又始まつた、先生の異様な音楽が奏せられる位に軽く思ふやうになりては、効果はない。唯に効果のないのみならず。徒らに兒童を壓制して、教師が生徒の言ふことに一言半句耳を貸さず、自己の都合よき爲めに、常に教權を以て壓制するときには、其の結果生徒をして畏縮させ、奴隸的人とならしむるか、さなくば偏狹剛慢の人たらしむるに過ぎない。規律を遵奉させるのは束縛ではない。故に一旦相約したとは必ず實

行させ、約束の日に差出すべき物を忘れて来たならば、其の由を直に報知する様にさせ、萬一差出しもせず断りもしない者あれば、其の児童を呼びて差出さざる理由を訊し、其の理由正當ならざれば何故持参しなかつた。持参しなければ断りに來べき筈であつたのに、断りにも來ないのはこれ違約したのであるし又他の正しき児童が前前の眞似をしたらばどうするかと云ひ聞かして、自ら其の罪の輕からざるを自覺させ、其の差出さなかつたのに正當なる理由があつたなれば、何故に差出すことが出來ない趣を告げなかつたかといふ位に戒めてこれを許し、必ず約束は守らしむるやうにしなければならぬ。尤も、當初其の約束を生徒と結ぶ時は、生徒の都合を十分聞いた上で之れを決定すれば、其の守らざるべからざることを自覺させる力は一層強烈である。以上は、私が或る教師より聞き及び、非

常によい訓練法だと思つてゐるが、其の人の話にかくすれば生徒は始め非常に苦痛に思ふたらしいが、一二月後には殆んど習慣となりて、何等の苦痛も覺えないらしい様子が眼のあたり見えて、規律正しい人間となつてくる様に思ふ。習慣は第二の天性なれば、かくしてこそ品性の陶冶といふことが全うされるのである。故に眞の自由は嚴格なる規律と相伴ふべきもので、各自の自情落勝手次第に振舞ふのをいふのではない。故に規律を守らしむるといふのは自由にさせようが爲めの豫備手段であるからして、自由と我儘といふ意味を誤解しない様にすべきである。

又平等とは、無差別にして公平無私であるといふ意味なれば、全生徒に關したことは、何事も大多數の利益をはかりて爲すべきは勿論であるけれども、各個人個人の訓練上に就いては、唯何の標準もな

く一様にせよといふのではなく、生徒の能力體力さては、個性をよく考へて、それに適應するやうな訓育法を取れといふのである。例せば、常に沈鬱な天性の者にはなるべく活潑なることを言ひ聞かせ、活潑すぎる即ち運葉な人間には、答案の書方作文の思想など、日常の動作に至るまで、一層詳細に注意して實着になるやうに導びくべきである。然るに教師が自己の都合をはかり、自己本位なる利己主義より割出して生徒に接するとか、生徒の服装容貌等によりて、教師が其の待遇を變へるとか、生徒の家の財産の有無によりて訓育の方法を變ずるとか、父兄の社會的地位ある生徒に對しては、其の生徒が我儘をし不都合をするも黙して見ぬふりをして居る等のことは、眞の訓育法でない、平等なる訓育ではない。訓育上必要なきこれ等のことを標準として、それより割出したるものは、私偏にして不公

平なるものである。ただ生徒といふことをのみ眼中にをき、一人の人間といふことを頭に置いて施す訓育こそは、無差別公平無私なる眞の教育的訓育である。而してすべての兒童に對して同じく生徒なりといふ平等點より出發したならば、眞の平等的訓育である。畢竟訓育といふことは教師の崇高なる人格によつてなされるべきことであるから。

#### 第五節 智育德育の奨励を閉却するな

近時體育熱が盛になつたが其の風潮たるや、勝手自由でなく、所謂社會的化し個人より團體へと推移して、團體的遊戯なる野球、庭球、短艇など奨励せられるらしいが、これは最も賀すべき傾向を示しつつあると思ふ。青年男女の健康を増進することは最大急務である。ですから猶一層これを奨励せなければならぬが、智育及び德育方

面の獎勵は如何かと願みつゝ歩調を同うして進むべきである。然るに現下の教育状態を観るに智育德育方面の獎勵が比較的等閑に附せられて居りはすまいかと思はれる。さて私のいふ智育とは、知識的方面科學の研究といふことで、體育の手段たる體操、野球等にも智育及び德育は多少養成することが出来るが、こゝでは智育を養成するやうな體育法は指さないのである。併して知識的方面の語學、數學、物理、化學、國語等はたゞさへ頭の痛む學科なれば生徒は之れを避けようとして、運動會の時日などを生徒に選定させれば、必ずそれらの學科の缺けるやうな日を選んでくるが、體育及び美育を目的とする體操、音樂、圖畫などといふ學科は、特に導かすとも學生の喜ぶ學科なれば、少し指導すれば、生徒は喜んで爲すやうになる。即ち運動は當然盛になるべき素質を持つて居るが、知識的方面

は之れを學ぶに或る苦痛を伴ふ。その苦痛たるや、肉體上でなく精神上のもの故、之れが勉強を忌み嫌ふといふのが一般の惡弊なれば、嚴重に指導する必要があらうと思ふ。そこで今の世の教育法を観るに、正課に於ては機械的ながらも順序を踏んで進行して居るやうだから別にいふ事もないが、校内運動會とか音樂會とかは、何れの學校にても、外來の人を招待し公開して盛大にするが、所謂學藝會などは大抵の學校が招待するのは生徒の父兄位にて公開しない。之れを公開したならばどうだらうか。さすれば生徒も教師も一層努力するであらう。又野球などは時々他校の生徒と試合をすることがあるが、學術方面に於てはかゝる事をしない。偶々男子の學校にて他校と聯合して演說會などを開催することはあるらしいが、女子の學校は番外として、男子の學校には是非かゝる會を度々催し、自己表現

の具とし、演説文章音楽により自己の能力及び思想を外の人に傳達する方法を練習させることが必要だと思ふ。又學校でする會にても、校外でする會にても、時には教師が全く關係しないで、生徒をして自ら題材を撰んでやらせ、後日教師がそれに對して批評を下すやうなことをするのもよいだらうと思ふ。なれども知育德育は、體育と同一歩調に獎勵せられないやうに考へる。多くの學校が、運動會は一般的であるが、學藝會とか音樂會とかの演者は數十人に止まり、殊に音樂會などにて演者たる生徒と招待したる外來の人のみで、在校生と雖も一人も會場へ入れないやうなところもあるといふことだが、生徒の爲めの音樂會か、外來人の爲めの音樂會か、世人或は誤りて、教師が自己の效を誇り、或は父兄に衒はんとして生徒を利用してゐるのである。教育上の事業を以て興業物視してゐるのではない

かと非難したならば、それに答へる辭はないであらう。さなくとも生徒の大多數は、ただ聽いて居るのみである、よき手本に接し上手なのを聽くのも素より利益でせうが、よほど勝氣な兒童でない限りは、兒童をして自分は出來ない者なりと自ら卑しめて、努力心を挫折しはすまいかと思ふ。特にかゝる時の演者は皆優等生のみである。而して又特別に兒童の程度以上のことを指導するのであるから、或は天才教育といふ方面より見れば差支ないかも知れぬが、優等生をして益々優等生たらしむるの不公平をどうするのであるか。又音樂等では、上手な者の中へ一人でも悪い聲の者が混ると、良き者の聲を全然打消してしまふから悪しき聲の者はやらすることが出來ない。實にさうである。下手な者はやらせられないに相違ないなれども、教育上より斷案を下せば、下手な者でも折々交代してやらす

がよいと思ふ。大勢の面前へ出てすると、自然度胸が据るやうになり、一つの膽力鍊磨精神修養ともなるのである。ですから常の授業の際にても、何れの學科に限らず、兒童に教壇を貸し與へて、自己の意志を文章に又は談話によりて他人に傳へる練習をさせるべきだと思ふ。故にかゝる學藝會などの場合には、なるべく多くの兒童を活動させ、常に一部の生徒に偏しないやうにすべきだが、餘りに拙劣な者をして何の用意もなく、突然公會の壇上に上せば、反つて其の者に耻辱を與へるやうなことになるれば、學校の内輪で此の如き會を時々催して、拙き者にも交るゝ演じさせたらばよいであらう。以上は生徒の能動的方面なるも、受動的方面について思ふに、往々學校外即ち社會で催さるゝ音樂會などへ男學生は別として、教師は女生徒を引率して行くことあるが、常識的若くは専門的學術に關す

る公會の講演を、聽講に行くといふことはあまりないやうである。併し學校の正課以外に適當なる時機があらば、教師は生徒を引率し、又は寄宿舎のある所なれば日曜日などを利用して、舎監は舎生と共に音樂會に行くもよろしいが、時には學生に聽かして有益なる學術的講演あらばそを聽きに行くのもよいと思ふのである。

蓋し音樂は美育養成上忽にすべからざる學科であれば、名手の妙技を聽かすのも直觀教授として、美育陶冶上の一方法で、誠に結構であるが、堯舜の世を外にしては、國は音樂のみでは治まらない。家も音樂のみでは治まらない。自己も音樂のみでは治まらない。元來音樂圖畫文學などいふもののみ盛になれば、其の國は滅亡するのである。其の國の文化は退步する、故に學校では學術的學科と、藝術的學科と合せ課して居るのであるからして、其の趣旨により學術



的社會的智識を獲得せしむる爲め、種々の講演をも餘裕の時あらば聴かすがよい。かくすれば社會の一員として國家の一員として耻しからざる國民を養成することが出来る。それに音樂會等のみに生徒を引率して行くといふと、知らず識らずの裡に、生徒の頭には音樂といふもの以外にはないことゝなるから、此の邊の調節を考へてしなければならぬのである。序に音樂といふことについて一言して置くが、由來、人生は、お母さんの懷で聞くねんねこ歌より、葬儀の哀の曲に至るまで、音樂と終始離れることは出来ないもので、人は先天的にこれを愛好し、何れの國民もこれを愛好すれど、音樂の本場は……と聞けば、何人も直に歐米を指さん。なれども、西人、我が日本人を目して音樂的國民なりと云ひしを世人は知つてゐるのであるか。埠頭にありて材木に齋口をつきたてたる人足も常に

口吟するのである。馬を曳き行く馬子も常に歌ふのである。早苗とる頃田植歌は野に漲り、大工は木遣歌に調子を合せて工事を運ぶ、乞食の一部も一種の音樂家である。藝が身を助くる不幸な老女の、昔幾多のうかれ男を、手玉にとりてたらしめし音をそのまゝの門付、古三味線を六十度にかゝへて清元を唄ふもある。殊に道路を流してゆく物賣りの聲までも音樂的にして、かばかり音樂を好みど、現時學校でする音樂や學校からつれて行く音樂會の音樂は、一口に音樂とは雖も洋樂であつて、邦樂ではない。洋樂と邦樂、各長短はあるでせうが、私は専門家でないから精密なる比較論をする能はないが、素人判断にも、洋樂の管絃樂（パイプ・オルガン）にタクトを用ひざれば、全體の調子をとることの出来ないのに比すれば、邦樂はタクトなくとも、十數の樂器を操つるに十分であるところを見れば、邦樂とても洋樂に劣つ

ては居ないかと思ふ。然るに學校等の正しい場所で使用されないのは概して其の曲に適當なるものも少く、殊に三味線、鼓などは其の奏する人に適當なる人格者乏しく、又邦樂の會は多くは風紀上よろしくない傾向があるから、詮方ないことであるが、日本の現今の生活程度はまだピアノを各家庭に備ふるといふまでには、向上し進歩して居ないから遺憾に思ふところである。さうであるが、教師たる者は、邦樂の内でも簫・箏・琴・謠曲・琵琶など卑しからざる純日本音樂のあることを心に入れ、又これを兒童に知らしめるやうにし、將來は邦樂の長所と洋樂の長所とを融和して、一の新しき音樂をつくるといふ覺悟がなければならぬ。次ぎは音樂會についてであるが、素より音樂そのものが美的のものであるからして、音樂を愛好して音樂會に出席する様な人々は、大抵は華美な服装をして來て

居る人のみであるからして、女學生をかゝる場へ導く時は動もすると音樂の妙技其の者を味はずして、虛榮の虜とならないとも限らないから、常に人は人、我は我なりと侵すべからざる信念を持つ様に、精神の修養といふ點に留意して生徒を導くことが肝要だと思ふ。又知見を廣くさせる爲め、時に小學校生徒に會社工場などを參觀させたり、(中等程度の學生にも必要なること論を俟たず)同一程度の他校の生徒、他國の生徒の成績物を蒐集し兒童に示して、努力心を奮起せしむるなどの方法をとつたならば、智育德育の爲め尠からざる効果を見るであらう。

#### 第六節 眞實なる訓育的教授

教授と訓育とは離るべからざる密接なる關係を有するものにして、教授といへば訓育を聯想し、訓育といへば教授といふことを思ふ。

言ふまでもなく教授は主として直接に智育に關し、訓育は直接に情意の陶冶を意味するのであつて、此の兩者を各別に孤立して施すべきものではない。故に教授に際しては、訓育上最も卑近なる規則秩序を重んずるといふ邊より歩を進め、勤勉努力の觀念を養成し正義人道によつて行動し、高尚なる人格を育成するやう、根柢的に精神を鍛鍊しなければならぬのである。故に教授に先き立つて、先づ多數の兒童をして授業を受くべき態度に導かなければならぬのであるに、教師が講義をし説明して居るにもかゝはらず、そこ、で私語が交され、何となく上の空で聞いて居るやうな風が生徒にあつては、訓育的教授ではないけれども、動もするとこの意味を誤解して、瑣細のことにも直に叱咤せんとするの態度に出づるが如きは、其の當を得た手段でない。かくすれば、生徒は教師を恐るゝこと甚

しく、教師は終に生徒と精神的接近をすることが出来ぬ。其の極、十分なる教育は施されないのであるから、教師の顔を見て着席し静肅になれば詰じる要はない。又教師のくるのを静肅に待たせるといふ學校もあるらしいが、之れも強いて要求せずして出来るならば非常に結構であるし、又非常に希望する所であるが。多くは、壓制的に絶對的に服従を強ひるのであるからして、反つて兒童の活躍せる精神を挫折するか、さなくば人間は反抗性を持つて居るものなれば、反つて前よりも一層悪いことをするやうになるものだ。子供でも悪いことをして居る時「するな」といふと一層悪いことをなし、「爲さなければならぬ」といふと一層じれてやらなくなるやうなことがある。その通り學校にても、單に壓制すれば教師の面前ではしなないが、蔭では全く別人と思はるゝやうな反動的行爲をするやうになると思ふ

のである。又、世間の教育者を見るに、訓育上とてか、將又、かゝる深遠なる意でなく、たゞ生徒が輕蔑しやしないか、威嚴を損ひはしないかといふ考であるか知らないけれども、他の節に於て例證せしが如く、生徒に對し作文習字の清書など、何日までに持參せよと約束し、其の約束期日に忘れて來て差出さない者が、一二人位ならば兎に角大勢あれば、生徒に小言を言ふよりも先づ自己を反省して見るがよい。自己の教授方法が拙劣にして生徒が興味を惹起しなかつたならば、生徒の能力の發達程度に適してゐなかつたのであつて、生徒が悪るいのでなく、教師自らの罪も幾分あると見てよいのである。併し如何に反省しても教師の方に過失を認めない時には、一層小言を言ふべきである。併し小言をいふにしても、無暗に叱るばかりが能ではない。徐に説いて、違反の背徳たることを自覺させ、且

つ今後とても教師より提出せし期日に他の學科の試験などありて差支へるとかなれば、それが延期を授業後代表者として級長より申込みば、事情によつてはそれを許可しないこともないからとでもいへばよいであらうと思はる。或は今後約束期日に遅れた者には、その成績物に對して添削の勞はとるも、全體の生徒に評點を附する場合に、その者のみ評點を明記しないとか云ひ渡すも一方法か。すべて謂れなき壓制は禁物である。そのことを止めさせようと思へば、その事の悪しきを自覺させると同時に、それに代るべき趣味を呈供して、その方へ導くといふことを忘れてはならない。

教師は生徒と何々の繪を持つて來て、今度の授業の時間に見せてあげませうとか、何々讀本の復習をすることかと約束したときは、教師自ら必らず實行するやうにしたならば、自ら規律正しい生徒となるで

あらう。生徒として無規律の生活に慣れしむれば、教授は到底有效に行はれ難いのであるからして、是に於てか、私は自由の服従といふことを望み、萬事之れを以て指導し訓練して行かうと思ふのである。尤も自由の服従とは、一旦定めた規律はどこまでも守らしむべきである。又熱心、誠實、努力を以て教授すれば、生徒に熱心、誠實、努力を以て事に従事する習慣を、養成することが出来る。人間の後半生といふものは、通例、前半生に堆積した習慣だけで出来上るものであるからして、兒童に良習慣をつけることは教育者の忘れてはならない大切なことである。又屢々虚偽・粗漏・誤謬の多い教授をすれば、教師を蔑視し、其の命令も訓示も効果がなくなり、善良なる氣風は、立どころに滅亡するのである。ですからして教授に際しては、これらの事を心得且つ各學科の教材によりて、充分兒童を訓

育的に導くやうにしなければならぬのである。

要するに、教師自ら善良なる模範を示したなれば、眞實なる訓育的教授は全うされ、兒童の人格向上をはかることが出来るのである。

### 第七節 日本的趣味の養成

熟々世の有様を案するに、種々なる外來思想は滔々として我が日本人の腦裏に流れ込み、ダンスでなければ舞踏でない。ピアノ、バイオリン、ハーモニカでドレミハを行らなければ音楽でないといふ調子であつて、我が國の固有なる純日本的の尊いものがあることを打忘れ、一向に、西洋崇拜熱に浮かされつゝあるは、本末を誤りたるものではないか。彼れの長を取り、我が短を補ひ、渾然たる一の完全なるものと爲すこそよいのであるが、それもまだかゝる小技に屬することのみならば兎に角、其の根本たる思想までが動搖せんとし

つゝあるは、國家の爲め憂ふべきである。國民をして斯くならしめたるのは何んであるか。其の原因は種々ありと雖も、多くは教育の弊といはねばならぬ。教育は國民を養成するを以て任務として居るから、教育の方法如何によつて國民を如何様にも導くことが出来るのである。學校を出て社會の一員となりし青年の精神は、容易に動かすことは出来ないけれども兒童の精神は導き易いから、國民が不正なる思想にかぶれたといつて、俄に騒ぎこれを制せんとしてあせるよりも、先づ兒童を日本的に教育すべきである。播かぬ種は生えないからして、宜しく國民の教育に任ずるものは、完全なる國民を養成すべきことに意を用ふべきである。而してこれが目的を貫徹するには、近きより遠きに進むべきである。宜しく學校に於て純日本の趣味を養成し、日本固有の美點を知らしめ、然る後外國のことを學ば

しむれば、徒に外來思想に感溺するやうなことはないであらう。そも日本の趣味を養成する方法は多端なるも就中人の多く云はざるどころのものであるが、女學校にも體操科中に隨意科として柔道を挿入せしめたい、中學校に於ては、既に業に擊劍柔術を隨意科として教授して居る處もあるやうであるが、女學校にて之れを學ばしむるところは餘り聞かないのであるが女學生をして之れを學ばしめたとて、文明的婦人の價值を損するものでもない。封建時代に於ける所謂武門武士の家に生れた女子は、薙刀又は柔術を練習しないものは無い。希臘のスパルタ婦人、中世紀の武士道的繁盛時代に於ける婦人も、多少之れを修得せしが如くなるも、婦人たるの美德を失ふやうなことはない。而して之れを一般體操又はダンスに比すれば、智育、德育に於て些の損失なく、體育に於ては常に身體を強大なら

しむるのみならず、意志を鍛錬せしむるの效は甚大なるものである。蓋し、柔術等は、婦人に取つては護身の一大要件であるからである。或は妙齡の婦人に於ては、生理上不適當なりとせば、小學校の上級生及び女學校の下級生に課するも亦よいではないか。

次に圖畫の教授を聞くに、中等學校は大抵西洋畫のみであるし小學校に於ては用器畫自在畫との外に、日本畫が言ひ譯ばかり少々あしらつてあるやうだが、用器畫は素より必要である、而して、自在畫必要ならざるにあらずとはいへ、西洋畫のみを重要視し日本畫を輕視するは如何なる理由に由るか、日本畫には日本畫の特色がある。水墨淡彩の草畫あり、濃彩華麗の細畫ありて、實に之れを書いて居ても妙味津津々として、謂ふべからざるの興趣を催する、我國民性に適合し、美育の養成に於ては、寧ろ日本畫の方が勝つて居るとも決

して劣つて居らぬから、日本畫を加へて美育を養成するの一助となさんことを切に望むのである。

音樂も亦單に、西洋音樂に限らんよりは、寧ろ日本固有の謠曲を合せ課したらば、美的の方面は勿論衛生的の方面、德育的の方面に於ても、西洋音樂に譲らない。但し素謠にすべきであつて、こは、純日本の文學にして、外形上よりいへば、其の文は實に美辭麗句の連続にして之れを誦すれば人をして天外に遊ばしむるの思ひあらしめ、音に美育養成の效あるのみならず。作文の一助ともなるべく、又其の内容上より云へば、其の文章の選擇の如何により、義俠的精神を養成し、道德心を發養するの功、西洋音樂に勝ること萬々ならんと思ふ。而して之れを歌はんとするとき、非常なる音量を要するものであるから、端坐して胸部を張り丹田に力を入れねばならぬ。従つて身

體を強在ならしむるの效亦尠なからざるを知る、或は謠曲を學校で歌はしむるは、教育上如何と掛念する人なきにあらざるべしと雖も、現に小學讀本に謠曲の文章が編纂してあるではないか、之れを音樂の時間に、洋樂と邦樂と交代的に教授するあらば、純日本の趣味を養成するの效豈鮮少ならんや。純日本の趣味の養成を學校生徒に望む所以のものは、大人となりたる後、徒に西洋思想の奴隸たらざらしめんとする老婆心に過ぎないのである。

#### 第八節 中等學校に新設を希望する學科

日本の小學校にては、從來讀本中に經濟及び公民の心得に關する知識を授くることになつて居るが、小學校にては兒童の精神の發達狀態が、幼稚にして修業年限も短時日のことゝて、十分なる知識を授けるといふことは、多少困難なる問題だらうと思ふ。ですからして、

現在のまゝにても差支ませんが、出来るならばこれ等の事に對しても、教科書中にある教材を敷衍して教授し、且つ普通醫學、豫防醫學的の教材を教科書中に編入して、これに關する知識を附與せんことを望むのである。さて小學校より一步進みたる中等程度の學校に於ても、經濟的知識などを授くるに特別に獨立したる學科を置いて居ない所がある即ち師範學校にては男女共に、法制經濟といふ一學科を設けて居る、而して中學校其の他男子の中等程度の學校も殆んど同様である。獨女學校に其の設けがないのはどういふ譯であるか、不審に堪へないのである。女子にはかゝる知識の必要はないといふ考へより出でたることならんも、往時、婦人たるものは、單獨に一步も門外に出づることを禁せられ、あらゆる方面より拘束せられ、又自らも拘束に甘んじて、唯自己の家庭といふのみで世間といふこと



を知らず。狭く、窮屈に一生を終るといふことを以て婦人の誇とし、世間も亦之れに對して、良妻賢母の尊號を捧呈して居たのであるから、かゝる時代なれば、讀み、書き、十呂盤、茶道、花道、其の他の遊藝の心得さへあれば、世は安泰に渡られ、人にも譽められたであらうが、今日の婦人は中々家庭にのみをさまりかへつて居る譯にはいけない趨勢になつてゐるのである。生活難や勞働問題で、世人が騒いで居る時であれば、同じく家政を料理するにしても、昔の婦人の如く悠長に呑氣に暮して居ることは出来ない。經濟上の知識を以て、一家の財政を切り盛りして行くだけの能力がなければならぬ。又國家が婦人に與へたる權利義務は、多少男子と異なれども、是等の概要を法制上によつて知得し居るといふことは、處世上に於て缺くべからざることであらうと思ふ。唯是れのみならず、歐洲大戰後

の婦人は、婦人の天分は那邊にあるかといふことを自覺すると同時に、社會的知識を豊富にし、新聞の論説を觀て、其の旨趣を解し、世界の趨勢を知り、又法制經濟に關する文書を読み其の意を心得、或は學者實業家などの卓説を聞いて、其の何んであるかを會得するほどの知識を入用とするのである。かゝる能力知識ある人を指して、眞の良妻賢母といふことが出来るであらう。故に女子に關する中等程度以上の學校にては、法制經濟の學科を新設せられんことを希望するのである。次に、普通醫學、豫防醫學的知識を教授することに關しては、現今の學校にては、何處も實施して居ない。又讀本などの教科書中にもあまりこの問題について、通俗的に平易に記述したるものすら見ないから、従つて醫學的知識を授くる機會は殆んど絶望といつてもよい位である。先づ試みに衛生といふことについて言

はんに、衛生なるものは意志が強固でなければ行はれない。自己の慾望を制し、自發的にするやうにすべきである。其の意志を強固にするには、醫學上の概念を學び、醫學上の知識を有しない以上は、出來ないのである。況んや、人間として生活して行く上には、病氣といふことは、誰しもあることである。古來人間は、四百四病の器といはれたほどであれば、病といふことを考へずには居られない。故に一方に於ては、積極的に運動をして、身體の壯健を計ると共に、消極的方面の衛生といふことも考へなければならぬのである。然るに、中等學校にては、これが知識を授與するに、生理衛生といふ學科が設けてあるし、又女子に對しては家事科といふ一學科が設けてあつて、淺薄ながら之が知識の概念を授けることが出来るが、其の内容は、實に實世間に迂遠な、幼稚な程度の低い、所謂骨ばかり

なれば、もう少し専門的に、醫學上の知識を確實に、徹底的に、實際的に授け、衛生思想を發達させるやうに中學校に醫學科を新設し、女學校に對しては現在の家事といふ學科を多少伸縮訂正するか、又は新たに普通醫學とでもいつたやうな、學科を設けられたならばと思ふ。併し世間の廣き、或は醫學を學ぶ要はない。病氣になれば身體の何處かに故障を生ずるから、直に病氣たることを感知する。さて病氣に罹りしことが判れば、其の専門家たる醫師といふものがあるから、餅は餅屋に任かして置けばよいと、安心立命をきめこんで居る人もあらうが、決してさういふものではない。醫學上の知識があれば、病を未發に防ぐことが出来る。幾多の生徒中には、往々、食事後直に野球などの劇烈なる運動をして、爲めに嘔吐するやうなこともあるが、これは衛生の知識が乏しいからである。又同じく病

氣に罹りしことを感知するにしても、早く感知するし、其の感知するや漠然たるものでなく、神経が悪いか、胃が悪いかと、大低の見當はつくし、醫師の診察を受けるにしても、時機を失して所謂手後れをし、臍を噛むやうなこともないのである。惟ふに、近時、醫學も日に月に、非常な速力で進歩して來たのは、誠に結構な現象であるが、かく世が文明になつて行く半面には、又善くない點が生ずるのである。それは何んであるかといふに、醫學といふものが段々専門的に幾種類かに分離して、神経科、眼科、内科、外科など、門戸を別に張つて居るからして、少し複雑な病になると、何れの専門家へ行つたらば適切であるかといふ判断に苦しむのである。故に醫學上の普通の知識や豫防醫學とでもいつた方面の概念でも心得させておく必要があると思ふのである。醫者の方に於ても、病の各科に通

じて居る人は殆んど絶無であるにも拘はらず、診察を乞ふものあれば、自己の長所でないことを顧みず、濫りに投薬し、反つて病氣を悪くするやうなことは間々耳にすることである。これは過渡の時代止むを得ないこと、はいへ、實に恐るべきことであるから、普通醫學に關して知識を會得させて置く必要があるのである。

要するに、以上の理由によつて法制經濟の知識と醫學上の知識とを、今少し確實に修得せしめられんことを、切に希望するのである。

#### 第九節 學科及び學級の系統的擔任

何事によらず、一旦然諾した事は、必らず爲し遂げようとし、自己の經營しかけた事は、如何なる艱難辛苦の暗礁に遭遇するも、之れを忍んで完成せようとするのは、人間の本能であつて、俠氣である。意地である。この心根がなかつたなれば、人間たる價值はない。食

つて飲んで物を言ひ、二本の足で歩いて居る動物に過ぎないと言つてもよいだらう。故に誠實に生活する心ある教師であれば、自己の擔任學科については、満身の努力を以つて、兒童の智徳の啓發を計り、如何に導いたならば、効果の實を擧ぐることが出来るかと腐心し、一學級を擔任すれば、どうかして一人も残らず有爲の人間に養成したいのだと、親が子を愛する如くに、苦心し焦慮するが普通である。若しこの精神的分子なくして、兒童など一切眼中に置かず、日暮主義で、唯パンの爲めに働いて居ると云ふ如き者が、徒らに教育者の名を負んで居たならば、不埒極る。そこでこの精神的分子をして、益々活動させるには、融通の出来る限り、同一生徒を何事も繼續して、學科なり學級なりを擔任する、即ち私の主張する系統的擔任を希望するのである。この事は、既に業に、實行して居る學校

もあるけれども、毎年々々學科なり學級なりの擔任が變更されるれば、教師の方に教育的努力心が薄らぐは自然の結果である。教育は人を選ばぬ事業だとは雖も、折角乗りかけた舟なれば、卒業まで面倒を見たいと思ふのは人情の然らしむるところである。又系統的學級擔任にすれば、月日を重ねるに従つて、生徒の個性を一層確實に感知し、身體上精神上の變化について、過去と比較し考慮して、それに應ずべき教育方針をとることが出来るし、且つ兒童の家庭の事情をも。一層よく知悉せられて、教育上非常な利益を得ることが多々ある。又系統的學科擔任について云うても、生徒の能力發達の程度及び一學科中にも其の得意不得意なる點、例せば、作文にても堅たしい調子に長けて居る者も、軟かい調子に長けて居るものもあるし、一句一句の修辭は上手なるも、全文に一貫したる思想がない者、又

は思想連絡し、文の筋は通つて居るが、平々凡々たる語句ばかりで、事柄を述べたといふのみで、聊かも文學的の趣味なく、無味乾燥なる者などあつて、其の長短を一年より二年、二年より三年と、受持年限の多き程、適確に知ることが出来るのである。而して、屢々學科の擔任を變更すると、教師の主義が違ふので、生徒が其の主義に惑うて解し難いことがある。例せば、裁縫教授に於ても、襪の縫ひ方など、先の教師と後の教師と相違して居るやうなことがある。故に系統的擔任を實行するとせないことによりて生すべき利害のほどは、既に了解のこと、思ふが、畢竟するに、系統的擔任法は、教育の徹底をはかることになり、教育の内容充實を期する一方法と云ふとも恐らくは非難を加ふる人はないでせう。尙これについて抽象論でなくして、具體的に説明をせよう。

尋常小學校では、一學科を擔任して居る教師は、すべての學科を擔任してゐる（但し男教師が出来ざる裁縫などは、女教員が擔任してゐる。）から、其の點は誠に好都合で、生徒の進級するにつれて教師も生徒と共にする、又中等學校では、教師各學科を専門的に分擔して居るからして、是非一學科を受持つて居る人望のある教師をその級の擔任とすべきであるが、そこで一つ困る問題は、小學校でも中學校でも學力不十分にて、下級生は教授することが出来るが、上級生は教授することが出来ないなど、いふ教師があつて、系統的擔任法は理想論としては可なるも、目下の教員不足、教員の粗製濫造にするに汲々たる時に於ては、結局言ふべくして實現しがたいことである。殊に、中等教育の方はまだしもだが、小學校では教育不足を聊つ今日、之れが實現を強要するのは酷だと、或は言ふでせうなれ

ども、上級生を教授することが出来ないやうな淺薄極まる學力の教員が、下級生を教へたとて到底満足に出来る道理がない。實際は上級生より下級生が教へにくいのである。かゝる者が教育の大體を全うすることの不可能なことは、推して知るべしだ。此の如き無能の教育者は、一日も教育界に籍を置くべき人間ではない。其の害の波及することは、豫想するに餘りありだ。故に、眞に教育の改善を圖らうと計畫したならば、大英斷を以て無能教員排斥といふ、この邊より歩を進めねばならないのである。

## 第十節 理想の教師

理想の教師たる要件は、種々あれども、高尚なる人格といふことに包含することが出来るのである。教師の一顰一笑の兒童に影響する力は大きい。其の人格が知らず識らずの間に、被教育者を化する

のであるから、教師たるものは、常に精神修養に努力しなければならぬのである。其の最も明白なる證據には、習字は心畫なりともいつて、人の個性が其の字に現はるゝものであるからして、多年習字を教授して居れば、巧拙の差はあれども、何處と云ふに言はれない所に、教師の字と生徒の字と相似通ふたる所が出来る。又兄弟とか、夫婦とかいふ間柄の人等の字を見ると、是亦相似通ふたる點があるではないか。又馬などでも、其の飼育して居る人の性質と相似通ふ性質の馬となるといふことである。飼主が温順な人であれば、馬も温順であるかほり、一寸した溝があつても後退りするが、其の馬が強暴な性質の人に主人替をすれば、強暴になるこのことである。これ、黙々の間に感化せられたのである。ですから、教壇上に於て、正直にせよ、義を重んぜよ、人には同情を以て接すべし。など、熱

辯を揮つて滔々と論じた所で、教師の平常の行爲が其の言と符合して居らなかつたならば、何んの効果はない。殊に中等程度の學生になると、多少判断力を有すれば、何の効果がないといふのみならず、寧ろ内心教師を批評し、教師の一言半句にも耳をかさないといふことになる。そも、眞理は全的要求即ち信仰の客觀的に表現せしものなれば、教材を徹底的に教ふるも人格の力である。故に教師にして人格が下劣であつたなれば、教育の効果は全く零である。

或る女學校の教師、折々富豪の生徒の家を訪問し、令嬢のことに託して、故に長尻を据ゑこみ、酒肴を出さなければ歸宅しないといふ、不心得千萬なことをする風があつた。而して、訪問を受けし生徒は、何かその教師より小言を云はれると「昨日先生は、我が家に來り饗應してやつたのに、我に對して小言を言ふとは何んだ。生意氣臭い。」

と。暴言放語して敢て耻ぢない。之を聞いた他の生徒は、さうかゞばかりそれに賛成し、はては其の教師の時間になると、何時も教師の命ずる事をなさず、他の本を読み、机の蔭にて細工物などをして、教師に勝手に喋らして置くといふ有様になつた。之れ、私が或る學校の生徒より聞いたことであるが。かゝることはよくあることである。かく下劣なる人格では、教育の如き一國の過去現在未來と關係して、常に多少の貢獻をなすべき、高尚にして困難なる仕事は、満足に出来ないものである。教育者の職務は、一種の専門業プロフェッションなるも、職業といふよりも、天職だといふ決心を持つてする人がなければならぬ。参考までに、左に、ザルツマンの説を擧げて教育者に不向の人を書いて見よう。

一、一攫千金を希望し、金銭の爲めに心を動かす人。

二、立身出世を望む人。(校長、視學になつたとてしれたものである。)

三、深い研究をしたいと思ふ人。(小學教師には殊に不向)

四、華美な交際をしたいと云ふ人。

五、大金持ちに成らうと云ふ人。

又學識才能に於て缺けたる點ならば、是亦教育者の資格はないと云つてよいでせう。如何に親切に教ゆるも、常に負ふた子に教へらるるといふやうな地位にあつて、あやまつて取消ばかりして居れば、徹底的の教授は覺束ない。生徒の信用地に落ちて、教師の人格というものを認めなくなる。教師の人格といふものを認めれば、教師の言ふことは何事でも眞實と思ふのである。教師の言ふたことが前言と後言と相違したりして、誤謬といふことが判れば、自ら人格とい

ふことは消滅するのである。小學校の教師は、あながち、學者でなくともよいけれども、社會的知識を有し、日進月歩の世の文明に後れをとらないやうに勉強する人でなければならぬ。この事は勿論中等教員にも必須條件であつて、見るもの聞くものについて研究し、且つ抄録して置くべきである。而して、なるべく様々なる階級の人に接し、種々の社會的會合に出席し、講演を聽いて知見を開拓し、殊に小學教師は、多方面の書籍について精讀よりも、多讀といふことを忘れてはならないのである。此の如き用意の平常ある人は、教師となつてもよいのである。

次に生徒に對しては、愛情の念のないものは理想の教師ではない。愛情は高尚なる人格より出づるものである。教師は生徒を我が子の如く愛し護らなければならぬのに、教育界の進歩せざる結果か。一般



に學校の教師生徒を引率して旅行し、ある旅館に逗留してゐる時に教師のみ上等の食事をとるやうなことがあるとの事であるが、血を別けたる眞の親子が、如何して、子供と食事を別にしようや。自分は食へずに置くも、子供には出来るだけよき物を與へるといふが、普通の親の子に對する情である。然るに親に比すべき教師が、かゝる情愛のない行動をとつてよいものであらうか。これは何處の學校でもある弊である。又聞くに、某地方の學校とかのことであるが、生徒教師に告げに来て、「級友の某氏發熱腹痛にて臥床して居られるが、如何に手當すべきか。一寸見舞に来て下さい。」と、之れを聞いたる教師の言ひけらく、「僕が行かずとも治る時が來れば治る。」と空ら嘯いて居るので、生徒は教師に對して云ひしれぬ惡感を抱きながらも、已むなく再び病友の枕頭に戻り、子供ながらも介抱に手をつ

くしたので、幸に間もなく全快したとの由、これは極端なる例なるも、平素授業の際にても愛情と同情とを以てして無暗に壓迫しなれば、生徒は教師を畏れ避けることなく、教師を親み、充分に知能を啓發する、所謂自由平等的教育を施すことが出来る。さりさて唯愛情ばかりになると、威嚴がなくなり易い。威嚴がなかつたならば兒童を無規律な状態に陥らしめるから、眞面目な教育は出来ない教育者たる者は威ありて猛からざる態度、即ち生徒と楽しく常談など交して遊んで居ても、いざ教壇に立つたなれば、何處となく侵すべからざるところがなければならぬ。さきに述べし如く、生徒の宅を屢々訪問し、生徒の信用失せて、その教師の言ふことは何一つ眞面目に聞かなくなつたなどは、人格の下劣といふところより遂に威嚴を失墜したのである。又或る男學校の或る教師は、授業の時に同級中

の一、二人缺課し、教場外にありて、ボールや鼠の死骸を教場に投げこんだり、試験の時、生徒がカンニングをして居るのを知りつゝ、それを制止せずして傍視し、剩へ、殆んど同じやうな文句の答案を得て、一言も生徒に言はないとのことであるが、これは先生があまりお人がよいので、生徒に輕蔑された結果であらう。又學識なき爲め威嚴を維持することが出来ないといふこともあるが、教師自ら反省し自覺し自己の修養につとめたならば威嚴は、保全することが出来る。併し、客觀的作用より威嚴を保てない場合がある。それは何人教員が出入しても、何年奉職して居ても、常に職員中の最下級に居る者は非常な人格者で、非常な學識才能を有する者でなければ、生徒は其の教師の職員中最下級なることを、何時とはなしに聞き知りて、最初から卑しむ色があるからして自ら威嚴はなくなり易く、

殊に感情敏き學校生徒に於ては、こを思ふことが強いのである。故に、これを救ふには、教師自ら一層修養努力せなければならぬと同時に、當局者の力によらなければならぬのである。何年経過しても職員中の最下級に置くのは、其の教師の無能だといふことを暗示して居る。(公平なる待遇ならば) 故にかゝる無能なるものは、教育上害になるから速に辭職された方が得策だ。又、小兒と交り遊ぶことを好まず。あんなことをするのは馬鹿らしい、日に日に無能の域に進んで行くやうな氣がするなど、いつて、自分一人高くとまつてゐる者は、理想の教師と言はれる資格はないのである。段々述べて來ましたが、この外に、忠實とか、熱心とか教育に興味を持つとか、教師の身體の強壯とかといふ條件が、理想の教師といふには必要條件だが、これらの中教師の身體云々の件は

別として、すべて高尚なる人格より生じてくるのであつて、幾多の教育書にも見えて居ることであるから略して置きますが、現在の教育者を見るに、前述の件々に適合したる教員は少いのである。せめては私の胸中に描く理想の教師に近い教師が居たなれば今更事新しく教育の改善などと叫ぶ要はないのであるが、教育の根柢となるべき教師に其の人を得て居らないから。現代の教育は不完全である。王陽明は知行合一を説けども之れが實行は難いのである。實に言ふは易く行ふは難い。次には、幼時父母に別れ、繼父又は繼母の手に依り、或は全く他人の手によりて養育されたなど、境遇に變化多き者は、理想の教師とはいはれない。かゝる變化の多き境遇の中に養育せられし者は、非凡なる者とか、自己の修養によりある信仰を持つて居る者とか、非常によい教育の感化を受けて居るものでない限

りは、其の行を二にし、表面は柔順なるも裏面は剛腹にして、何處となく一種の悪い性質があつて、猜疑心強く、残忍性を帯び、常に沈み勝で、心の奥底に暗い蔭が漂うてゐるといふのが共通的の一般性である。ですから、かゝる教師は、自ら生徒を不活潑ならしむのみならず。生徒に對してもあてこすり皮肉めきたることのみいふて。苦しめるやうなことがあるからして、かゝる教員はよろしくない。教師の資格問題について、その生家の職業の貴賤を論ずる人があるが、これは勿論必要條件なるも、實父母の有無などの方が重要な問題だと思ふ。ところが我が國の小中學校に於ける教員の素性を正して見ると、變化多き境遇に養育せられしものは、男教師の方が女教師より少い。兩親の内何れか一人又は二人とも亡き女の兒には、「親がないから……先生にでも……」といふ皮相な考で、教員を志

望させるからして、女學校よりも師範學校には親のない生徒の方が  
多い比例を示してゐる。又教師といふものを社會が冷遇してゐる爲  
めか、將又人智が發達しない爲めか、財産も相當にある、正しい家  
の兒女の教師になる者は少い、惡るい家庭に育つた者が多いので、  
教育を受けてもある程度までは善良に導くことが出来るが、良家庭  
に生長した者の教育を受けたのには及ばない。かゝるものが人を教  
ふる位置に立つのは理想ではなからう。この問題は、社會全部に根  
本的の改善をしなければならぬのである。猶、教師と關聯してゐ  
るから言つて置くが、寄宿舎に入れて子供を損ふたといふことを往  
往耳にするが舎監は生徒と寢食を共に與にするが故に、其の人選は  
最も注意すべきである。

## 第十一節 如何なる人が視學及び校長に適するか

視學又は學校長たる人は、幾多の教員の上に立ちて其の仕事を監視  
し、教員の進退を左右する權利を有するものなれば、専門的知識を  
有するに若くはないが、必ずしもなければならぬことではない。普  
通の學識と人を統御する才能とがあつて、世の中の事情に通じて居  
る人であればよいのである。自己の主張は是が非でも通さうとして、  
他人の説には一切耳を傾けず、權力者即ち上官又は生徒の父兄に對  
して、無暗に媚び諂ふも、自己より下位にあるものにはひどくあた  
り、部下の職員に對しても人格を無視し、待遇を偏頗にし、自己の  
利益の爲めには公私を無視して何ものをも犠牲にせようといふもの  
は視學たり校長たるの資格はない。視學や校長が部下の教員に子供  
の世話をさせ、又は公務を缺かせて、書記や給仕女を折々自宅につ  
れゆき自家の用をさせたりしてはならない。このことは教員も亦慎

むべきことである。又或る學校にて父兄會を催し、作文習字等の生徒の成績品を陳列して、父兄の展覽に供し、併せて生徒にも研究せしめんが爲めに數日そのまゝにありしに付き、一教師はこの期を利用して生徒の批判力兼作文力を練らんと欲し、廣く他人の作品に就いて、誤字脱字を初め修辭上の優劣及び圖畫習字等の作品に對する自己の感想を、文學的に一作文を綴らせ、十分添削して生徒の手に返し、更に作者は勿論文中に於ける友人の姓名など、一切無記名にて其の文を清書させ、一綴にして各生徒に廻覽する事としたのである。(時に展覽會の作品は既に取り去られありし。)校長はそれを知るか、否や、左様な者を生徒の家庭に持ち歸らせられては困る云々とて中止せしめらる。これ校長教師共に教育に熱心なるより致せし處置なりと云へども、教師が豫め校長に協議せざりしは、よろしくな

い。又校長が父兄の思惑を心配するのも感服が出来ぬ。折角企圖した新法案なれば教育界の爲めに實行せしめたならば如何であつたか。校長はその作文集を父兄が見て、我が子の作文が他の生徒に比して悪るいと、非常に不快に思ふから假令姓名が明記してなくともよろしくないといつたが、父兄は反つてこの處置を贊稱し、生徒も亦非常の趣味を以てしてゐたのであるかのやうに聞き及びしが、實行したなれば、或は兒童の能力を發達せしむべき自發的自由主義教育法として、善良奇抜な方法であつたかも知れぬ。要するに、校長は公平無私は勿論、部下の職員をして、知らず識らず勉強するやうに指導して往かねばならぬ。故に部下の職員の言ふ事と雖も、兎に角一應は聽取して、共に徐に是非善惡を研究すべきである、否らざれば、教師が生徒の質問を峻拒すると同様、其の結果職員をして教育に不

熱心ならしむるのである。さりとて其の部下の教員より排斥運動でもせられはしないか。又はそんな深い意味はなくても、教員の機嫌を害する様な事はなきかと、何かの協議に於ても其の言葉に多くの敬語を用ひ、一舉一動教員の意氣を尊重するが如き傾向などありとすれば、自由主義の統御でなく教員をして我儘にし、全教員の心を統一することは出来なくなるからして、校長たる者は公平無私なるべきは勿論、寛嚴よろしき態度でなければならぬ。校長が全校生徒を一室に集めて訓話する時には職員は全部出席すべきであるのに格別の要用なくして出席しない者があつても、寛容するが如きことあらば、不統一にてよろしくない。それかといつて寛大にして欺かれぬやうにせねばならぬ。

翻つて思ふに、教員待遇論の章下で述べべきであるが、物質的待遇

の様様を見るに職員間に彼是の論を惹起させない爲め、均等的方法によることが多い。これ、生活の安定を圖るといふまでにて、職員の奨励といふことにはならないのである。又は偏頗なる愛憎の一時的感情によつて、俸給額を左右するが如きは言ふまでもなく不公平な處置である。故に階級學問を打破して、實力本位により十目の善良と認むる人を拔擢するやうな待遇をしたなれば、教育の事業は隆盛になるであらう。是亦校長の勇氣が必要である。又各教師に授業時間を配當する時などは、教員と教員との間に均衡といふことを考へてしなければならぬ。然らざれば彼は我の上位にありて、我より教授時數が少いとか、彼は手數のかゝらぬ即ち準備のあまりかゝらぬ、成績物等の檢閲も皆無である學科のみを受持つてゐるのに、我と同じ時數とは均等といふことを眼中に置かないやり方であるとか

など、部下の教員をして言はしむるやうなことで、矢張り教育の實效を期することは出来ないものであるから、校長たるものはかゝる所にも注意せらるべきである。特に、視學に註文するが、學校を視察する時、形式的の幾多統計的帳簿等にのみ満足せず。内容の充實といふ點に意を注ぎ。授業を參觀するにも少くも二三十分以上教室に止まりて、十分なる批評眼を以て觀察すると共に、表門より學校そのものに就て觀る以外、間接に裏門より内容方面を探索する。即ち、父兄とか優等生とかに學校及び教師の模様等を質問すれば、非常に参考となるべきことがある。故にかゝる所に着眼點を置いて、公平に判斷する人であつてほしいのである。

校長たり視學たる者が部下の言を聞き、部下の考を容るゝといふ度量なく、唯に壓制壓迫に出づれば、さはらぬ神に祟りなしとて、言

ふことも言はず、爲すことも爲さず、校長なり視學なりと教師の間には、大いなる溝渠が穿たれて、互の意志が通じないやうになる。又學閥階級制度、殊に愛憎偏頗によつて待遇に差等を附せらるれば、特別に奮勵するもそれだけの報酬なく教育事業は素より犠牲的事業であるとか、氣を永く持つて數十年後の結果を持つべき仕事であるなどと、耳に舐があたりほご聞かされ、又教育書で承知して居ても、如何に現代を超越してをらうとしても、あまりに壓制的待遇を受けて居れば、金より何より精神に不快を感じ、常に快々として爲すことも爲さないのである。そこで可も不可もなく、パンの爲めに教職を塞いで居るといふ者が。然らざれば、時もあらば一日も早く他の社會に轉せようといふ考を抱いて自暴自棄といふにあらざるも、一時の椅子に教職を借りて居るといふ教員ばかりになる。而して活

氣ある有爲な教師は、日に月に、他の社會に轉じ、のこる者は老朽無能ばかりとなるのである。かくては教育事業は振はない。進歩しないのである。この老朽無能者も、他に轉じたいが一寸其の口があるまでと浮腰になつて居るものが、抛げやりの授業をするやうになつたなれば、それが兒童に悪影響を及ぼすことは甚大である。官廳、銀行、會社等にては長官が壓制的なる待遇をすれば、その下にありて働く者は、パンの爲めとてさすがに辭職もえうしない、不誠實なること勝手次第なるも、其の影響する所の範圍は狭く事務の遲滯すること位なるも、教育界にてかゝる現象があるときは、何ぞ事務の遲滯位で濟まんや。幾百の兒童を殘ふといふ結果を齎らし、其の影響する範圍は莫大であつて、國運の消長に關することは尠少でない。これを救護する方便は、他にあらず、校長たり視學たる者は

公平無私。教師の能力を觀る眼識を備へ、教師の人格を重んじ、ある程度までは自由の權利を與へ、互の意志疏通して愉快に育英の業に當らせたらば、教育の改善進歩を圖ることが出来るのである。教師の仕事には、賃銀を以て償ふべからざる精神的分子あれば、それに対して精神的に酬ゆる所がなければならぬ。終りに臨んで今一度反覆せんに、學校長及び視學たる者は學徳高く、何處までも公平無私に、部下の職員を謂れなく壓迫せず、公私を混淆せないやうにありたいものである。而して事の主要を握つて裁斷して行くだけの才能があつたなれば、部下の職員を統一し、教育上の改善も出來、理想的の學校とすることが出来るであらう。

### 第十二節 教師の能率増進を圖れ

小學教員の日々の行事を見よ。孜孜として一時一刻も休息せず。午



後三時に授業は終るけれども、やれ教授案、やれ何の統計表、やれ何の道具製作とて、格別思考を要することでもない、多くは機械的事務に日も足りない有様で、帰宅せよといふ頃は、既に業に街頭に電燈の光り輝く頃で、帰宅すれば心身共に倦み疲れて自己の修養などといふことをする勇氣はない。實に同情の涙を潑がざるを得ないのである。偶々かゝる機械的事務に忙殺せしめない學校あるも、日の没せざる中に帰宅するのは教育に不熱心なりと、視學より譴責の眼を向けられようことを杞憂し、爲すこともなきに雑談をして徒に尊い時間を空費して居るといふことである。是れ誰れの罪ぞや、或は山間僻村の學校に至れば、この悪弊はないが、聊も自己の修養に意を注がないのみならず、雑誌一冊見ないのである。併し教師の知識慾に廉なることは、郡市共に一般の通弊である。時間に餘裕を

與ふるも勉強しないことは、獨り小學教員のみならず中等教員も殆んど同様である。或る教育學者が中等教員に對して、餘裕の時間を持ちながらそを徒費し、而して自ら専門家を以て許して居るには、嘔吐するほどの批判を下せしが、其の批評の當否は姑らく置き、小學校教師の知識を増進せしむるには、時々名士を聘して講習會を開催し、或は學校に新刊雜誌等を購入し、或は教師をして交替に、教師の講演會を開き、自己の研究の結果を發表することを催さしめ、又は視學たり校長たる人が、時々部下の教員の授業のみならず、他校の授業を參觀し、其の感想を機關雜誌にでも書くやうにしたならば幾分か教師を自覺せしめ、而して教師自ら勉強の興味を惹起するこゝどが出来るかと思ふ。尤も初は義務的に勉強するやうになつてもよいのである。教師は生徒を導くのに其の事に興味を起さしてすると

いふことが、教育上最も肝要であるが、生徒ばかりでなく、教師にも之れが必要である。それには社會が教師に興味を惹起せしむるやうに仕向けなければならぬ。社會は教師に對し有形無形の禮を盡し時に講演を要求したならば、教師たるもの何も空々たる智能で安心して居られやうや。多少とも勉強せねばならぬ。勉強するときには終には其の興味を覚え、完全なる教育者となるであらう。但し前述の如く小學校教員は、勉強しようとしても眞の自己の自由になる時間がないからすることが出来ないのである。従つて教育の實質の方面に意を用ふることに暇がないといふことも無理からぬことであるから、教師の教育事業に於ける眞の實質的能率を高めるには、積極的方面に於けると同様に、消極的方面に於ても相當の方法を講じ、先づ時間的優遇法を講ずると同時に、機械的事務に忙殺せしめ、又

は學校用の道具の製作に、教師をして職人と早や代りせしむるの弊害を打破しなければならぬのである。

### 第十三節 教師の教壇上に立つまでの用意

教師の最も陥り易き悪癖は、虚構といふことである。教師は生徒に比すれば、先覺者として多少智能が秀で、居るといふのみにて、神ならぬ身が宇宙の萬事を知つて居る謂れはない。よしや博士なりとて自己の専門とする學科に關しては、人よりより多く知るといふのみで、何んぞ悉く知るといふことが云はれようや。況んや國民教育に携る小學校教員、將又、中等教員が宇宙の萬般に精通して居るとはいへないのである。故に平易なる事柄については、生徒に誤謬を教ゆることもないでせうが、少し複雑なることになるに於ては、生徒に誤謬を教へないとも限らぬ。時に生徒より、それは誤謬でないかと

質問せられ、心中に其の誤りなることを知つても自己の誤であつたといふことを告白して、前言を取り消すの勇氣なく、故らに博識なることを衒ふとして、飽くまで自説の正當なるべきことを主張し、又は自己の説にても、生徒の説にても同意義であること、曖昧模糊たる返答を與へて恬として耻ぢないものも少くないが。教師たるべきものは虚構を避くべきである。間違つて居たことを發見すれば之れを取消し、知らないことは知らずと正直に答へ置き、後日研究の結果其の事が明かになつたならば、生徒に教示するがよろしい。一度教へられた事、殊に、質問までした事に關しては印象が深く、生徒の頭へ強く響いて居るからして容易に忘却せず。一生涯誤のまゝで過ぎるやうな事にもなれば、決してかゝる惡癖に陥らないやうにしなければならぬ。始終人を教へて居る間には、疑問も起り未了の事

にも遭遇しないこともない。故に教師は常に自己の學問の淺薄なることを知りて、新知識を得ることに努力し、虚心以て時に生徒からも學ぶといふ覺悟がなければならぬ。又歴史地理國語等を教授するに當りて、不分明曖昧なる點を取調べ、教科書の餘白に其の事柄を記載して之れを読みながら教ゆる人があるが、自己の不明なる點を充分に研究したなれば之れを教科書に預け置かず。善く、我が頭腦に藏めて教壇に立たねばならぬ。否らざれば教師が其の事を徹底的に知つて居るのではないからして、徹底的に生徒の頭に浸み込ませることは到底不可能である。殊に文典とか物理化學等に於ては、専ら教科書の範圍に限らず。其の教ふべき條件のみを豫め組織立て置いて、縦横無盡に活きたる例を示しつゝ、教科書を説明する用意がなければならぬ。修身等の教授には特に其の努力が必要であらう

と思ふ。かくすれば生徒の爲めのみならず。教師自身の知見を磨くのに非常な効果がある。自己の思想を確實にせようとするには、眞面目に之れを人に傳ふるがよいのである。所謂教ふるは學ぶの半ばであるといふ古言は、我れを欺かないことを知る。

## 第十四節 無用なる形式を廢せよ

教師も生徒も形式のみに囚れて居るといふことが、現下の教育の大缺陷である。形式を過重する結果、教師は自己を修養する餘暇乏しく、生徒は活社會に不要なことに時間を空費して居る。かゝる實力なき教師と生徒の間に營まるゝ教育といふものは、死んで居る。活動して居ない。私はかやうな教育を指して死蔵教育とでも言ひたいのである。然らば、形式とは何を意味するかと言ふに、先づ教師に關係した方面によりて言ひますれば、無益な種々の記録、統計表

を幾種類も作りて重複したことをして居ることである。然もその記録統計表を教育上の参考にすれば兎に角、外見をつくらふ爲め、即ち、視學に見せるとか、學務委員に示す爲めにするに於ては愚の骨頂だ。又これを見て良教員なり良學校なりと喜ぶ學務委員視學あらば、其の頭腦の低きを歎かざるを得ないのである。かゝる教師にして、かゝる監督者にして、教育を益々悪化せしめるのである。

さて教授細目及び教授案の問題であるが、學年の初めに當り、各教科の毎週教授時數を定めたる學校の課程表に基き、更に詳細に教材の分量、排列等を豫め定め置くも結構であるが、實際上或は豫定通りに進行することは殆んど不可能のものであるやに思はる。而してかかるもの、調製に一兩日で書き終へる人は稀れにして、多くは五日間も六日間もかゝるのであるから、今少し簡單のものを調製せしめ

ることに致したならば、實行上反つて効果が確實であるかと思ふ。又教科を一週中の各日に配當したる日課表に基き、其の教授すべき教材を調べ其の取扱方を記入したる所謂教授案の如きも、其の人の性質伎倆にもよるが、一々明記するの煩を避け。單に其の大要に止め、其の他は腹案的教授案を作製せしむるやうに練習せしめたならば、反つて有效なるやに思ふ。但し始めて實際教授の任に當るものには、學校出身者と否とを問はず、一二月乃至三四ヶ月間は詳細にこれを調製させることが或は必要だと思ふ。然るに、教授に熟するも毎日詳細なるものを調製し、剩さへ教壇上で用ふる言語まで几帳面に書いて置くなどは勞多くして效なきことだ。殊に「何々さんはお話をしてはいけません」など、前日より豫定して置くに於いては、馬鹿らしいといふも尙愚である。教授といふものは豫定通りに

行はるべきものではない。臨機應變の處置を取つてすべきものである。然るにかゝるもの、調製に没頭して、毎日日没後でなければ學校の門を出づることが出来ないなどは、教育を施す上に於ての輕重を知らないのである。

教授の段階 教授の形式（教式）などに於ても決して之れが形式に拘泥して、教育者と被教育者との活動を抑制してはならないのである。かゝる形式的書類調製に時間を徒費し、形式に偏した教授を受ける兒童は、又形式而已に全力を集注し、字を書くにも、筆力とか氣詔とかいふ事には少も意を用ひず。間架結構も必要だが、これにのみ意を用ひるといふ工合で、無用な所へ精力を用ひすぎてゐる。そも、教育の事たるや、學術共に必要にして輕重はない。而して其の術たる教授は、論理的科學的知識的方法によりて施すべきもので

あるといふ假定を根柢とし、生徒と人格的接觸を以てしなければならぬ。故に教育史、教育學、教育的心理學及び論理學によりて、學と術とを研究することは教育者の一日も忘るべからざる事であつて、其の學理と教授法とを闡明して居ても、いざ教壇に立ち、生徒を左右さして見ると拙劣なる者ありて、教育の術といふとは、先天的能力によることであるが、但し練習によりて多少の伎倆を得せしめることが出来るのである。けれども其の學科に對する實力がなかつたならば、教授上の伎倆は眞の徹底的教育を施すに何の役にもたない。教師の實力は、方法の拙劣を補ふことにはあるけれども、方法の巧妙を以て實力を補ふことは甚だ難しいことである。故に、實力の十二分にある犠牲的精神を以てする教師であつたならば、内容の充實した善良なる教授法は生れてくるのである。——教育書になき良

方法をも案出して教授するのであるから、舊套を墨守して死したる教授はしないのである。例へば習字を教へても、教授法の示すことを鸚鵡返しにして居るも、肝腎の教師が悪筆で、習字と云ふことに苦心したことのない者では、新教授法を自ら案出し時に臨み處に應じて、自發的教授を施すことは出来ない。話は違ふが文部省教育調査會などにて中等教員の檢定試験合格者にて、教育上に於ける實際的經驗のない者には、一二年間實地授業の練習をせしめる云々の説がある様子なるも、私は解し難いことだと思ふ。何となれば同じく獨學とは云へど、私立學校などに通學して勉強したものは容易に修得して居るからして、或はかゝる制度が必要かも知れぬ。なれどもこれまでに小學校などへ奉職し一度も教鞭を取りし事なく、田舎にありて眞の獨學以て試験合格の月桂冠を得る者は、年々幾人あら

う誠に少数でせう。合格者の多くは既に教鞭を取つて居たものであらう。——そこで思ふのに、全くの田舎出の獨學以て此に至つた者は生徒の前に立つことこそ初めてなるも、其の任に當らせれば初め四五回は不十分なるも、教育學の示すところを自己の學力と才力とに依て教授の任を爲し果さうとする位のとは、勉強中の努力を以てしたらば十二分だらうと思ふ。ですから、かゝる者に對しては、實地教授の稽古をさせる要はない。なれども、不安心ならば校長又は先輩者が、二三次回教授を參觀し監督すればよいのである。文部省でかかる制度を設けなくてもよいと思ふ。そんなに當局者の心痛するほどのことはないのである。折角合格しても、尙、一二年間實地授業の稽古云々といつたなれば、反つて氣概あり意氣ある有爲なる者をして悲觀させ、試験檢定を受くる者をして望を絶たせるに至りは

せぬかと老婆心に堪へないのである。さて私の意見は、實力あるどころに眞に充實せる徹底せる、兒童の興味を惹起するに足るべき教授法が生れ出で、新教育學、新教授法を案出して、從來の教育の不完全なる點を改善することが出来る。否らざれば、處方箋的の教授細目、教授案を作製し、教育の事業を機械的にし、死物視し、自由の努力を束縛し生きた教授を不可能ならしむるのであると思ふ。然しながらフイヒーテ云ふ「吾等は生活の爲めに努力するのであつて、眞の尊き生活は唯人格の發表としての生活である。」と、かゝる生活を營まんが爲めには、ある人も言ひし如く人は常に精神上の戦争に立つ決心がなければならぬ、戦争に戰略が入用の如く、教授に際しては、教師は常に一定の計畫に従うて、全材料を連絡せしめ統一し順序立てなければならぬ。是に於てか、教案が必要となつて来る。

教案なくしては教授は行はれないのである。併し前述の如く教授に熟すれば、腹案的教授で十分である。我が國に於ては幸に教科案の主要なる根基となるべき課定表を文部省で制定してあるからして、之れによりて多少案排し無意味無用なる形式的のことは省略して、教師は教育上の實質的能率を高めることを工夫し、自己の獨立努力によりて研究し、其の教材を正しく認識し、教材に没頭するのみならず。生徒に没頭しなければならぬ、教師は生きたる教授法である。而て教師が自己を犠牲にするは即ち愛である。愛は高尚なる人格より發生した者である。愛のない教師は眞の教師ではない。この根本精神なくして教授細目などのあてにならざる形式的事務に日も足らない有様では、骨折損の草臥儲である。——愛のある實力のある教師にして、始て教育の重任は完了されると斷言する事が出来ると思ふ。

## 第十五節 漢字と羅馬字及び毛筆とペン

漢字と羅馬字。——讀むから蠻カラ臭く又ハイカラ臭い。この文字たるや。一は我が國民が古來使用し來りしもの、一は近來使用せられんとするものにして、實用上各長短がある。一概に此を可とし彼を非とする譯には參らぬやうに思ふ。併し私はその優劣の判決を與へる頭腦はないから、たゞその物自身について少しく考へて見たいと思ふ。

さてローマ字については、世人或は是とし或は非としその議論は區區にして十分研究しつゝあることなれば、今は多くを語らないが、兎に角ローマ字は音字なれば複雑なる意字即ち漢字に比すれば、その表現は極めて簡單であるからこれを使用せば、教育上知識の形式を授くるに汲々たる國語教授の困難を救ひ、今よりもより以上の實



質多き教育を施すことが出来るだらうが、他の東洋一流の文字で言ひ知れぬ無限の意味を簡明なる一語を以て表示することが出来ない。従つて其の語意の妙味を感覺せしめ會得させることがむづかしい。又何分にも漢字は我が國古來使ひ慣れしものなれば、文章を書くに漢字を使用してさまで苦痛と思はぬが、ローマ字は練習が足りない爲めか、書きにくく、讀みにくい。但しこれも練習の程度問題なれば、ローマ字とても練習すれば漢字同様にならんも、將來は兎に角、今のところローマ字を我が國民の文字として一般の使用を見ることは到底出来ないこととせう。但し停車場等に於てすら、既にローマ字を使用して居る程に發達して居れば、現代人には多少この文字をも解得せしめたいのである。

次に漢字といへば毛筆といふことを聯想するが、そも毛筆字は一種

の藝術として見ることも出来るが、學校で毛筆習字を課する本旨は藝術的技能養成といふやうな深い意味でなく、又それほど深い練習をさせるのでもない。たゞ他日社會に處するに當つて不便を感んぜざる様、實用的技能を授くるのである。而して文字を使用するの道は、必ずしも毛筆によらずともペンあり鉛筆ありて、あながち毛筆を用ひずともよいやうなものだが、ペンの走り書きは何んとなく無趣味に感ぜらるゝも、墨色鮮かに濃淡相交り、大小の文字相半ばしていとさら／＼と書きつらねられたのは實に清々しい、かゝる手紙を手にした時は、何となう爽かなよい氣分を唆るものである。殊に婦人の手紙には一層ふさはしいと思ふ。これのみならず、毛筆はペンのより其の人獨特の個性の發露が明晰で惡筆と能書とを問はず、其の人其の人によりて特徴を異にして居れば、ペンでは誰のか判らな

くても、毛筆であれば、あゝ、あの人の自筆だといふ事が窺ひ知られて慕はしい思がするものだ。又吉凶事などの詞は、毛筆で正しく書いてあると見るから崇厳な思ひのするものである。然しながらこれには先づ墨を磨らなければならぬ。而して書くこともペンに比すれば時間を要するから、今日の多忙な時勢に不適當だと攻撃する人もあらう。なれども文明の特産物として世に墨汁といふものもあれば、墨を磨らずともよければこれが爲めに時間を空費する云々と心配する要はない。けれどもその書くことの敏速、遅鈍如何といふことについて考へれば、其の人の天性にもよるが、練習程度の多少によりてペンにも速い者もあり遅い者もある。毛筆にも速と遅との差はあつて一概にいはいれない、毛筆なりとて達者に至ればペンを持つて書く人に何ぞ劣りませうや。現今の初等中等の學生について見る

に、運筆遅々、字體拙劣にして活社會に役立たないことは、毛筆が第一にしてペン之れに次ぎ鉛筆が比較的最も迅速かと思ふ。さりながら、鉛筆は不鮮明になり易すければよろしくないから、先づ別として、その書きぶりの遅速といふことは、その人の伎倆によつて差あれば、同一伎倆の人についていはなければ眞の優劣を決することは出来ぬが、概していへば一般にペンの方が、速く書く人が多からうと思ふ。又ペンで書く毛筆より餘程美しく書けるので、毛筆では非常に拙い人も、ペンだと荒がかくれて多少見易くなる。これペンの福德である。尙毛筆にも万年ペン様のものが發明されたらば、(毛筆の万年筆様のものはあれども不完全である)多少早く書くことが出来て、活社會よりそんなに排斥せられなくなるかも知れぬ。ペンでも万年ペンでなかつたならば随分「インク」をつけるのが面

倒なものである。

かくペンにも毛筆にも、それ〴〵特徴はあるが、毛筆にもペンの及ばぬよいところがある。そはペンは何んぼ大きく書くにも細くより書けないが、毛筆はいくらでも太く大きく書くことが出来る。ですから一寸した小商人の店頭に掲示してある、「何々あり」とか、「小僧入用」などとか書いてある貼紙は、何れも皆毛筆である。西洋では如何にするか知悉せないが、能々看板師にかけなければ御手製では濟みませまい。そして毛筆であれば太く書いて居るからペンよりは見易くあるが、ペンのみとなり毛筆がなかつたならば、如何に一時的の粗末なものだからと思つても、細工は出来ないで止むを得ず看板師の手を煩しペンキの力を借りなければならぬのである。又物品に附する定價記載紙即ち正札は、ペンで記載して置けば可なる

も、青物、魚類などには水などがかゝる故、多くは薄板に毛筆で記してあるが、この方が明瞭でペンより遙かによいと思ふ。

かく毛筆字とペン字とを論じてくれば、紙の問題も當然附随して起るべき問題だが、日本紙だとして絶対にペンを使用することは出来な

いではないが、ペンには西洋紙を用ひなければペンの運び遅く。毛筆は又西洋紙には不向である。ですから今毛筆を絶対に廢すれば、自然日本紙を使用しないといふことになる、日本紙にも特徴あるからこれを廢止することは又出来ないことである。ペンと毛筆とは一寸考へても以上の如き優劣があれば、何れも一概に排斥は出来ぬ。十分研究すべきであるが、兎に角多忙なる社會に處するには是非ペンが必要である。ところが前述の如く、小中學生のペン運用も毛筆の拙なるに比すれば較く優つて居るがあまり上手ではない。非常に

書くことが手遅い、又毛筆習字も一週に一時間位の習字時間を設置して、敏速、明瞭を尊ぶ社會に活用しないのを詰るのは酷だ。ですから私はペン習字と毛筆習字との實用上に役立つだけの技能を授くるには、強いて習字用の時間は設置せずともよいがすべての學科を學ぶとて字を書く時には、必ずペン及び毛筆を併用させる様にしたらばよいだらうと思ふ。

序ながら、漢字と毛筆字とが我が國の現状と如何なる關係を持つて居るかといふことについて一言せよう。そも今の支那は、某國に教唆されてか。排日運動に急にして何故か我が國を敵視して居るやうだが、地理上到底支那も我と交際せずしては濟まないだらう。互に手をとりて進まなければ雙方の爲めに結局不利益だらう。漢字は元支那より渡來したもので、彼と我とは文字を同じうする。毛筆もさ

うである。而して毛筆は漢文字を使用するの機械にして、漢文字は彼我の思想を交換するの具なれば、眞に日支親善を圖らんとすれば、支那が漢字を廢しない以上は、我が國も漢字を絶對に廢することは到底不可能事だらう。こは善隣的現象にして當然の理ではないか。漢字が廢せられぬと同様、毛筆も廢されないであらう。延いてはこの意味に於て、ローマ字も歐洲語が我が國に行はれるにつれて、新に作り出された一種の新假名にて、主として舊來の假名や、漢字を知らぬ西洋人に我が國語を知らせる爲めと、歐文の中に國語を挿入して印刷する上に必要があるものなれば、歐洲と交際上外國語と共に缺くべからざるものだと思ふ。

#### 第十六節 教師は醫學上の知識を必要とす

教師は教ふべき所の學科に對する知識が豊富であつて、教育上に於

ける學理と經驗とに富んで居るだけではよくない。多少醫學上の知識をも有して居らなければならぬ。所謂學校衛生たる照明法・換氣法・清潔法・暖氣法などいふことは、教師は當然承知してゐなければならぬのみならず。又、兒童の身體の發達に留意し、生理的、心理的方面などにも意を注がなければならぬ。これらの事は、既に業に、幾多の教育學者、心理學者の力説する所であるから、煩冗を避けて今更事新しげに大切な頁を徒費しないのである、又私の望む醫學上の知識といふことは、藥學、病理の概要を知りて校醫の仕事を理解し、専門的に心得て居れといふのではない。只普通醫學豫防醫學といふことに就ての心得あらんことを希望するのである。殊に寄宿舎の監督者たる舎監は、この知識の必要を一層深く感ずるのである。私が教へて居る生徒に不成績の者が四人あつた。其の平

常を觀察して居ると、他の生徒と別に異狀を認めぬけれども、間違ひさうにもないところで、妙な答をしたり、突然と案外な事を言ひ出したりして、他の生徒の笑を買ふ事が再三であるから、私は何かの病的現象ならんと考へ、その生徒の寄宿してゐる同室者に聞く、よく居眠をして……彼是思ひめぐらせば、遠視眼又は近視眼より來たる神經衰弱か。又は蓄膿症ならんと推察し、醫師の診察を請ふべく注意を與へしところ、診察の結果三人は近眼で眼鏡を使用することとなり、一人は蓄膿症と決定し治療をしたのであるが、それ以來成績は別人の如く善良になつて來たのである。又かういふことがあつた。本を讀ましてみると聲が戦く、併し其の生徒は級中の優等生であるからして、恐怖の念に驅られるのではなささうだ。若しや心臟を害して居るのではないかと、體操・音樂等をする時の様子を聽

き料すも判然せず。又其生徒に聞くも別に苦しいとも思はぬ云々、父母にも自分の身體に何か異状を認めないかと相談せよと言ひしも、確たる答を得ず。其の儘に過ぎし所、一年後の今日に至り醫師に心臓病であると宣告さるゝに至つた例もあるのである。

かゝる事もあれば人の子を預る教師は、多少醫學上の常識が必要である。又生徒の病氣たることを知るも、醫師に診察を受くる時機遅れ、生徒の自己診察自己療養に任せ置くときは、同じ全癒するにしても日數を多く要するやうなことになる、病人の看護上についても、不用意にして思はざる結果を來すことがあるのである。之等のことは、何れの學校にても、校醫があればこれに一任すればかゝる苦勞は無用のやうであるが、校醫とて朝から晩まで學校につききつて居る譯にもゆかないのである。殊に生徒を引率して旅行して居る時な

どには、この知識の必要を痛切に感ずることが往々ある。堂々たる或る學校の一教諭が修學旅行中一生徒、病の床に横はる身となり、そが體温をはかるには檢温器を襦袢の上よりはさませしといふことを聞いたことがあるが、この教師は壯健にして醫師に手を握つて貰つたことのない、幸福な人であつたからして、この知識なく、かかる沒常識な真似をしたのであらうが、教師としては不心得も甚しいのである。又私が嘗て聞いた事であるが、修學旅行滞在中、一生徒、俄然、發熱甚しく、體温三十八九度を往來して居るのに醫師を招かないで居たが、終に招かざるを得ざる状態となりしも醫師の來診によつて纔に事なく濟みしと。かゝる場合、醫師を招かないで居られるといふのは、醫學的知識がないからであるが、この知識なきが爲めに思はざる悲境に陥ることがある。又醫師に診断を乞ふにし

ても、其の時機を誤るからよく注意しなければならぬのである。併しこれらの事は、常識と愛情とがあつたなれば、十人が十人氣附くことである。又寄宿舎などで多くの生徒を收容して居る時は、病人が一二人はあり勝のものであるから、舎監たるべき者はよく生徒の身體に注意し、校醫の診察を受くる時、當人が自己の身體について醫師に語ればそれにこしたことはないが、尙舎監よりも其の病状について觀察するところを詳細に物語り、療法についても十分相談すべきだと思ふ。醫學的知識ある者よりの觀察は、又醫師の参考となるべきよき材料に着眼するからして、得るところが多いと思ふ。其の他應急手當法などについても、一通の知識が入用なことは云ふまでもない。然るに之れを知つて居る人が甚だ少いから、醫學上の知識を得せしめたいのである。又序に一言すれば、學校には、葡萄

酒の上等品一二瓶は準備して欲しいが、之れを準備して居る學校はどれだけあらう。恐らくはかゝる用意周到の學校は殆んどないでせう。葡萄酒は腦貧血等にて卒倒したる場合に飲ましむべき用がある、而して永久の保存に堪へ腐敗しないものであるから、之れを購ひ置くと別に損害はない譯である。然るに何故か之れを用意して居る學校は少い、これのみならず常備薬すらない學校も往々ある。併し素人療法ほど危険なものはないから考ふべきことだが、醫學上の知識が多少ともあれば、醫師に診察を受けるまでに利益を得ることが多いのである。

### 第十七節 トラホームの媒介者は誰か

學校病の代名詞たるトラホームの退治策は、幾多の識者の腦漿を絞りにて考究し、種々なる妙策もあれども、トラホームの蔓延しつゝあ

ることは事實である。

之れについて或る人曰く、器物を共同に用ひる習慣があるからいけないと。或る人曰く、顔や手の清潔といふ事にあまりに無頓着で衛生思想に乏しいから困ると。然り、物品や不潔な手はトラホーム傳染の直接媒介者である。直接媒介者があれば間接媒介者もあるべき筈だ。先づ私は茲に學校に於けるトラホーム蔓延の最大原因をかぞへよう。學校に於けるトラホーム患者の有無は、時々舉行さるゝ身體検査によりて大抵判つて居れば、其の患者に對して治療法を注意し、且つ公德を重んじて病の全癒するまでは、なるべく共同用の運動器具等を使用しないやうにとか。或は手を洗つてからそを使用せよ。などと命じ、一般生徒に對しては、手を洗はない限りは濫りに眼に觸れるななど、必然的の心得を聞かして置くなど至れり盡せりだが、こ

れを絶滅することが出来ないのは何故であるか。勿論種々なる原因動機もあらうし、學校以外に感染するといふこともあらう。なれども、何ぞ教師自身がこれが媒介者たることを知らうや。人は、トラホーム傳染の間接媒介者である。授業の際に机間巡視をなし、生徒の持つて居る鉛筆をとりて書き、或はその手を取りて教へる。かくして彼より此に、此より彼に轉々と巡るので、如何に教師が授業前に手を洗うて清潔にして來るも、かく机間巡視をしてゐるうちにはいつしか手に病毒が附着し、教授しつゝ、病毒を賣り歩くといふことになるので、餘り健全でない眼の性の者は、思はず知らずその手を眼に觸れたが爲めに遂にトラホームとなりて苦しむやうなことになる。殊にかゝる弊害のあるのは習字とか圖畫とか裁縫など教授する時なれば、その授業時間には教師は酒精を脱脂綿に含ましたるもの



(水で洗うてもよいが不便で實行は不可能だらう。)を持參して居て、それで一一手先を拭うてから他の生徒に接するやうにでもしたならばよいかと思ふ。又體操、遊戯などの授業後には必ず手を洗うやうに嚴命すべきである。

## 第十八節 習字及び圖畫の教師

技能學科たる習字及び圖畫を、生徒に教ふるには、男教師が適任なるか、女教師が適任なるか、この事については、從來教育界ではあまり意に留めなかつた問題ですが考ふべきことだと思ふ。現今、我が國の尋常小學校にては、學級擔任者が圖畫も習字も教授することになつて居れば、教員に男女の別をせず。又生徒の男女をも眼中に置いて居ないが、中等程度の學校になると、學科々々によりて専門の教師が教へることになり、男生徒を教育する中學校には、まだ女

教員の採用せられて居るところはないから問題外であるが、高等女學校にては、習字圖畫を擔任して居る男教師が少くない。

抑も、習字とか圖畫とかいふ學科は、家事や裁縫と異り、女子獨占の學科ではない。寧ろこの道の心得あるものは男子に多いのである。由來文部省にても習字及び圖畫の女教員養成の機關は殆んど設置してないからして、女學校に習字や圖畫に關する技藝及び其の學理を具備して居る専門家と云つても耻しからざる女子の教師は、其の數少く需要に應ずるに足らない。従つて男教師が自然多く採用されて居るからして、その根本たる教員養成の方法からして改善しなければ女學校の圖畫習字の教師を、全部女子にするといふことは到底實行することは出来ないであらう。聞けば、本年より女子高等師範學校に、繪畫の専修科が置かれるさうであるが、今日のところ一人も

卒業生はない。けれども、漸次其の方向に進めて行けば、數年後には必ずこの事を全國の女學校に實現することが出来ると思ふのである。

さて、私が何故にかゝることを主張するかといふに、それは教師と生徒との風紀上より云ふのである。故に生徒の幼稚なる尋常小學校に於ては、深くかゝる用意を必要だとしなが、女學校にのみ特にこれを必要とするのである。習字とか圖畫とかいふものは技能に屬する學科なれば、理論即ち習字の方なれば運筆法、結構法を始め枕腕、提腕、懸腕、及び永字八法の側、勒、努、趯、策、掠、啄、磔等圖畫の方なれば輪廓法、位置法、運筆法、主眼照應の關係、遠近法、骨格法、精神法、描線法、描寫法、彩色濃淡法等について、詳細に説明をなすことも素より必要なるも、技能科の教授は、反覆練

習による個人教授にまさる良法即ち速成法はないのである。理屈でいふよりも實地に試みさせた方が其の効果が多、故に教授に際しては、一般的普遍的の理論を述べて然る後、個人教授を主として中間巡視をなし、手を取つて教へなければ其の上達を期待することは不可能事である。若しかくの如く教授をしなかつたなれば、第一には無味乾燥の教授となり。第二には生徒の努力心を挫くのであつて、教師に取つては只教室にぼんやり立つて居るといふのみで、誠に氣樂なこと此の上もないが、これは教育的の方法ではない。さすれば個人各自の手を取つて指導するといふことになる、こゝに一つの問題が横るのである。相當の年齢に達した少女は、たゞさへ男子に對して多少差づる念があるものである。或る男教師が云つたことがある。「掃除の検査にでも行くと、女生徒が椅子の上の上つて窓硝子

などを一所懸命に拭うて居ても、早速仕事を止めて椅子より下りてしまふが、女の先生にはかゝることはしない。」と其の他私の観るところでも、日常の舉動の内に其の様子は明瞭に現れて居る。又野外運動會等に於て、女生徒が教師を取り捲いて遊戯に耽る有様などを見れば、男教師より女教師を敬愛することの深いといふことが知られる。併し意志の多少確立しかゝつた女生徒は、時に女教師より男教師を敬愛する傾向がないではない。これは戀愛關係でもなんでもない。唯女教師が偏狭にして生徒に對してつまらぬことに意地を持つたりするからである。兎に角、女生徒は男教師に氣遣はしげにして、女教師に馴染み易き模様があるは争ふべからざるの事實である。さすれば男教師をして机間巡視もせず、茫然と生徒がなすがまゝにまかせて一時間を過すか、又は机間巡視をして、生徒の手を取つて

教へしむるかにあるが、それも眞面目に教へれば兎に角、肝腎の教授上の件はお留守にし、無駄口を聞いてあるき、甚しきは教室の神聖を破る様な嫁入り話などを口にする教師もあるやうである。性慾的教育も絶対に不可なりと云ふ譯ではないから、時と場合とを見て適當なる方法を以てすべきだのに、習字圖畫の教授時間で、習字圖畫の教授目的を忘却し、生徒の手を取りながら野卑なる言説を弄するのである。このことは、私が修學時代に、某女學校に通學して居た一生徒より聞き及んで居たことであつて、現今の女學校にてもかかる話は往々聞くことであるが、生徒と教師との間に間違の生ずるやうなことは萬々一にもあるべき筈はない。否私はさやうに信ずるのである。けれども、男教師よりは寧ろ女教師にして、人格の高尙偏狭ならざるは勿論其の技能に卓越して居る人に、この學科を任せ

るやうにしたい。否なれば、男教師たるも特別に教育上の知識を有する人にして、人格技能共に具備する人に任すべきである。音楽教師も習字圖畫の教師と同様に感ずるのである。

## 第十九節 男女教員の心得

男女の教員を採用してゐる學校にては、教育者のあられない風評を立てられるやうなことがまゝありますが、雙方とも精神修養が足りない結果であらうかと思ふ。男性女性相親みあふは人間の本能にして、自然的現象であるといへばそれまでなるも、苟も人間は萬物の靈長たるを以て自任してゐる者なれば、何ぞ、獸類に等しい行爲がせられようや。同じ職員室に男女教員椅子を並べ、言語を交して居ても其の間に禮儀といふものがあり、互に相當の見識ありて、威嚴があつたなれば、決していまはしい噂の立つきづかいもないでせ

う。男女教員がたゞ二人、時々散歩に行つたり、何んとなく不仕墮落な風をしてゐたりするが故に、事實如何はしき事はなくとも、世人は色眼鏡を以て見るのである、故にかく疑はれるのも教員自らの罪である。而して疑はれるのみならばまだしもだが、教育界に於て實際醜聞を耳にするから残念である。殊に小學校―郡村の小學校教員は一般に甚しく墮落して居ると聞く。かく醜聞を流すのは、人格が下劣で何の信念もないからである。何の趣味もないからである。心が虚であるからである。かの兼行法師も云つてゐる。「我等が心に念々のほしきまゝにきたりうかぶも、心といふものゝなきにあらん心にぬしあらましかば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。」と實にさうである。心中に信念のない者はそこに一の空虚が出来る。この空虚を満す爲めに、男にもあれ。女にもあれ。

佗びぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらば去なれどぞ思ふといふことになるのであるからして、空虚を生せしめざるやうにすべきであるそれには、内的に教師自ら絶えずある希望を持ちて努力しなければならぬ。希望は人生を楽しくするのである。ドストイエフスキーが云つたではないか。「努力は總てのものを征服する」と。さて外的には社會より教師に講演を時々請求するとか。學校として數種の雑誌を購入して、互に廻覽するとか。一ヶ月間に讀過せし書名及び其の梗概を記載して校長の手許へ差出させるとかといふとにしたなれば他を思ふ餘裕なく、従つて男女間の醜聞も跡を絶つてあらうし、教員の自修力を養成する唯一の方法ともなるであらう。男女教員の交際をして、神聖に公人としての生活を遂げしむることについて、主觀的方面より説述したが、以下客觀的方面について述

べて見よう。さて同僚の赴任、轉任に於ける歡迎會、送別會、又は新年宴會などを學校内で開宴するのが殆んど一般的の様だが、第一これからして甚だ不感服だ。官衙に於て宴會開かれたといふことは會て聞かない。然るに、官衙より一層神聖ならしむべき學校であるのは如何と思ふ。而してその方法たるや、生徒と共にするならば、私は敢へて拒まぬのみならず。大賛成であるが、生徒を交へなければ酒一滴も用ひず、極くお手輕の茶話會にして、歡迎又は祝賀の意を表すがよからう。君子は獨を慎むべきである。これが第一要件であつて、素より外聞を彼是云ふ必要もないが、酒を用ひたりなどする時には、假令、授業なき時と雖も、生徒がこの有様を見たならば何と思ふか、殊に寄宿舎のある學校にては最も宜しくない。生徒は眼のあたり見ない酒宴の様子を、様々に想像したがるものである。

又よし、酒は飲まずとも男女教師合同にての宴會と聞いたなれば、世人の頭には如何に響くであらうか、況や、女教師殊に若い女教師が、酒を飲むといふことに於てをやだ。近來は女の先生にも豪傑があつて、遠慮なく酒をあをる者がある由、こゝまでくると女も中々發展して來たものであるが、女の酒を飲む姿といふものはあんなに見よいものでもない、ある國文に見えて居るが眞にさうであるからして、普通の場合の宴會の席上にも控へ目にすべきであるが、學校といふ看板を掲げた宴會では、酒を廢止した方がよい。(祝の意味で唇を潤す位はよいであらう。)元來酒は衛生上から云つても、經濟上からいつても無用の長物である。故に米國にありては、先きに婦人連が禁酒運動に熱中してゐたが、遂に禁酒令を布いて、高壓的に、これが實行を民衆に強要してゐるではないか、禁酒といふこと

に對しては、多少異論がないではないが、今日は論すべき場合でないから別問題として、時運が禁酒を要求し、法律これを容るゝに至つたのは、單に男子の力ではない先に婦人が自覺したればこそ禁酒令の實現を見ることが出來たのではあるまいか。故に日本婦人も、多少し覺醒が望ましい。又宴會を學校でせずして料理店へ持ち出すこともあるとのことですが、これにも賛成は出來ない。生徒本位で考へれば、學校内でするよりは多少よろしいが、社會の眼をどうしやう。外聞は思はなくても獨を慎まねばならないではないか。殊にかゝる場合お酌人(妓女)を呼ぶところもあるさうであるが、これは最も風紀を紊亂させる源になりはすまいか、故に、私の理想論としては、先にも云ひし如く、眞の茶話會を學校で開き、その印をして置く位の軽い程度に止めておいたならば、時間も經濟で非常によ

いと思ふ。又かゝる場合に限り大抵の學校は夜會のやうであるが、これは是非晝を希望する。歐米各國の夜會は、男女混淆にて互に手を取あうて舞踏などする様子なるも、泰西はこの習の生じたのは數千年の久しき昔にて、自ら社會の不文律ありて、男も女も互に權利を侵さず、禮儀を守り、馬鹿騷を演ずるやうなことはない、若しさような不都合極る人があつたなれば、其の人は永久に社會的自殺を遂げたも同然のこととなり、社會に容れられなくなるさうであるし、又歐米の食事をする時間は、日本のやうに酒杯を取り交して、だらだらと何時までも無制限時間でするといふことはない。料理が違ふだけに食事時間も短い。ですからして夜會を催しても差支ない。(舞踏會は別問題) 然るに我が教育に従事し、知識階級の人間なりと自任し、社會も許してゐる程の教育者が、男女同室に宴會を開いたと

て、宴會位が動機となつて、不義の行爲を敢へてするやうな下劣な人格者はないと断定したいが、時々新聞紙上に現れし教育者社會の醜聞は、私をして全然安心せしむることが出来ないから、も少し社會が發達し、人智が進歩し外國の如く徹夜の舞踏會等、時々世間で處々に開催さるゝ様になつたならば、或はよろしいだらう。又他の一面より考ふるに、世間體を苦にする譯ではないが、男女教員が、宴會を開いて夜遅くまで居るといふことは、世間はさう見るであらうか。今日の日本の社會一般の状態を見るに、男女の會合としいへば、多くはつまらぬ話をするものなりと相場がきまつてゐるのである。かく思うて居る世人は、如何に教育者の會合なりとてよくは解せんのである。ですから私は思ふ。世間の誤解を避けるには夜の酒宴は絶対に止めた方がよいと。又高等女學校など相當の年齢に達し

た生徒の居るところでは、男女の教員は平常の行動にても一層細心の注意を拂うて、公明正大に公人生活としての交際をして行くやうに努めねばならぬと思ふ。これは中等學校のみならず、小學校にても必要であることは云ふまでもないが、中等程度の生徒になると、男女教員の言行を常に注意して見てゐるのである。某實科女學校の教師、一團の生徒を連れて旅行をし、一旅舎に宿り、九時臥床といふ規則通りに生徒一同を床に就かせたが、男女の教師が夜の町の様子を見物に連れ立つて外出したとかいふことを、どうしてか、一生徒が言ひ出して、同級生に吹聴し、一問題起らんとしたが幸にして何事もなくして済んだといふことであるが、生徒に誤解を招く様な舉動をするのが悪いのである。教師たる者は人の見る見ないに關せず。行に陰陽を作つてはならない。男女教員の交際問題とは無關係

のことではあるが、修學旅行などにて生徒を引率して行つた時など先生の別室で食事をとるやうなことは何處の學校でもあることらしいが、これも人を教育する道ではないと思ふ。生徒の隣室で、生徒の食事をする模様を見ながら、先生も生徒と同じ食を喫するといふならばまだしもだが、生徒の室と先生の食事をとる室とは、全く没交渉であるといふに至つては言語道斷だ。先生と生徒と食卓を並べて旅行中に於ける感想談などを交へながら、楽しく食するやうにしたなれば、所謂官僚的でない。眞の温味のある家庭的の教育が施され、先生に對するよい感じを生徒の頭に刻み込むことが出来るであらうと常に考へて居るのである。

要するに、私の男女教員交際に於ける心得に關する思想は、儒教主義にして、「七歳男女不同席不共食」といふ頑固なるやうに聞ゆる



かも知れぬが、決してさうではない。何ぞ、男女同権論、婦人解放論の叫ばれ歐米婦人の参政権を得る今日、そんな偏屈なことが言つて居られやうや。席を同じうするも、食を共にするも、非難はしないのであるが、一般社會の知識程度の向上進歩を希望すると同時に、教育者として耻ぢないやうに、男女の間には自ら禮を以て交際するやうにと思ふのである。それには今少し男女教員の知識を高尙にし、修養する所がなければならぬと思ふ。

女教員の平常の態度について觀るに、悉くといふではないが、其の多くは長官たる校長などから眞面目なる相談をされると、直に顔色をかへ、何んもなく落付かない風さへあるにも拘らず。職員室などで男女の教員相集りて雑談に耽つて居る時の様子を見ると、實に傍

若無人、眼中に人なしといふ態度に出でてゐるやうな者もあるらしい。殊にこれは小學校に於て最も甚しいとのことだが、かやうな者には男教師も亦何の愼む所なく勝手に振舞ひ、輕侮の色を以て遇するのである。自ら悔つて人之れを侮るのであるから、愼まなければならぬ。併しかくいふ私も女の仲間であるからして、十分説明をするのに苦しむ。男教師の判定を乞ふより外はない。けれども私の眼から見ると、今の女は學問知識の程度は高まつたが、其の背後には婦人として最も必要な精神修養といふ點が、缺けてゐると思ふ。是れ、現代の女子教育の一大缺陷であるが、自己の修養を怠らず、如何なる誘惑に出逢ふともそれに心を奪はれず、確乎たる意志にて正義人道に従ひ、自己の自由意志の向ふところによつて進退をするやうな教育者ばかりに我が教育界がなつたなれば、長々と私が説き

立てたやうなことは無用である。こんなことをいふのは所謂野暮である。あゝ善良なる教員の一人も多く我が教育界に輩出せんことを希望するのである。

## 第二十節 虚榮の導火線

社會が物質萬能になると贅澤になつて來る、この渦中にある小兒がどうして贅澤を覺えないであらうや。子供でなくとも兎角人間は質素儉約には遠ざかり、榮耀贅澤には近づき易い素質を以て居るのであるから、社會一般が贅澤になり、親が贅澤をして見せれば、その子供も榮耀榮華を希望するは當然である。親も亦これをさせるのである。けれども人と同じ贅澤がせられる家の子供はよいが、贅澤の出來ない家の子供はどうするか。親に泣き附くより外はない。親は到底子供の欲求は容れ難いと思へども、愛する我が子の泣顔を見て

は出來ぬ工面をして、遂に我が子の望みを叶へてやるといふ工合で、よほど心得たる親でない限りは、子供の欲求を退けることは出來ないのである。又人が絹布の着物を着て來るのに木綿の着物をきて、我は我なり現在の我には不相應なりと云つて、平然として居るといふことは大人でも困難であるのに、ましてや、子供には望む可らざることであつて、少しでもよい方を希望するのが普通の子供の心理である。殊に女の子供はそれが甚しいから、子供の時から恐るべき虚榮心の芽を摘取する方法をしなければならぬのである。且つ立派な物を持ち、高貴な物を身につけて居ると、それを大切に思ふ心より不活潑になり易いからして、子供にはなるべく粗末な物を身につけさせて置くべきである。併しこれが根本的矯正法としては、先づ社會の贅澤な風を撲滅しなければならぬが、この問題は教育者一人で

出来るものではないからして、學校と家庭と協力して徐々とその惡弊を除き堅實なる國民を養成するやうにしなければならぬ。

家庭及び社會のことは、今は論せず、學校教育といふ方面に於て、虛榮の導火線は何處にあるかといふと、資産家の生徒、女教師及び寄宿舎制度等である。

資産家の子弟は金のあるにまかせて立派な衣服を着、贅澤な學用品を持つてくるが、資産家であるから自らは別に差支ないと假定したところが、他の何十人といふ同級生に及ばず惡影響は多大である。それは他の者はその生徒と同一の服裝を爲すことは到底事情の許さざる所で、常に羨望の眼を以て資産家の生徒を見て知らず識らずの間に資産家の生徒一人の爲めに、他の何十人かの生徒の天真爛漫な快活な精神は害はれ卑屈な憶病な引籠勝の者となるのである。己れの分

を知れどか、克己心を養成せよとか、教師が口を酸くして修身や國語の時間に説いても、この目前の現象に打勝つことは出来ぬのである。故に教師たる者は生徒の服裝に意を用ひて、如何に資産家と雖も他の生徒と同一の服裝をさせる様にしたなれば、生徒の虛榮心を長せないであらう。學校によつては男子の學校のやうに生徒の服裝を地質縞柄まで一定して居る所もあるといふことですが、私はそんなにまで畫一主義を取らなくても、たゞ人並はづれた華美な服裝をしてくる生徒に一言注意を與へて爲さしめないやうにすれば足ると思ふ。又資産家自らも公德を重んじて、資産のあるにまかせて恣な贅澤をしないやうにせらるべきである。

序に、服裝一定説について愚見を述べて見ますれば、小學校はあらゆる階級の子弟を收めて居れば、經濟上其の他の支障あることとて

別問題なるも、確かに、生徒の虚榮心を長せしめないといふに於ては最もよい方法ならんも、(一定の單衣上着は別) 生徒をして服装といふことについて、無趣味にしはすまいか。縞柄などは上級生を標準とすれば、下級生は年齢にも似合はぬ濫味な物を着なければならぬので、自ら沈鬱なる気分になるやうなことはないか。下級生を標準とすれば上級生は派手な物を身に着けなければならぬので、自ら沈着な気分が失せはしないか。將又、上級生と下級生との中庸をとつて選定せんか。是亦五十歩百歩にて、最上最下の生徒には餘りよいと思はれぬ。學校限りの服装であるから、無趣味とか、沈鬱とかの心配は不必要なるとの説もあらう。なれども、既に學校限りといふ念が生徒の心中に存する以上は、虚榮心を挫く効果が甚だ尠ないのではあるまいか。又その一定の衣服は兄弟姉妹の間に融通が利か

ないのである。ですから經濟上よりいふと非常な不利益だと思ふ。故にこれには一利一害あれば直に首肯しかねる所である。

又虚榮の導火線は女教師なりといふ前提について言ひませう。男教師は大抵洋服である。和服でも地質こそ違へ、色合が類似して居て大したけばくしきものはなき故、あまり女生徒の目を惹かないがそれでも年頃の生徒になると、背廣服がフロックに、フロックがモレーニングにかはれば兎角の批評をなし、ネクタイ等の變る時には一層痛切な批評を下すといふことであるが、女教師の服装は日本眼で其の地質、縞柄、色合等種々雑多である故に、たいさへよき衣服よき髪飾を希望する女生徒の心を刺戟し惱すことは非常なものである。嘗て或る先生が直接經驗したことであるが。寄宿舎に一事件勃發して、生徒の行李を検査する必要が生じ、或る室に至り生徒が行李中